岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 54

小阪部・永富遺跡
備中平遺跡
原遺跡

昭和57年度圃場整備に
伴う確認調査

1983年3月

岡山県教育委員会

文化課

小阪部・永富遺跡

序

本報告書には、圃場整備事業実施に伴う３遺跡の確認調査結果を収めました。

ここに収めました３遺跡の確認調査は、いずれも圃場整備事業に先だって埋蔵文化財の保護・保存の資料を得、圃場整備と調整を図ることを目的として、昭和57年度国庫補助事業として行われたものであります。

調査の結果、永富・小坂部遺跡（大佐町）では縄文時代後期から中世までの集落址約40,000㎡を、備中平遺跡（北房町）では古墳時代から中世までの集落址約60,000㎡を、原遺跡では縄文時代晩期から平安時代までの集落址約354,000㎡を確認することができました。

これらの成果を収めた本報告書が、文化財の保護・保存のため活用され、また、地域の歴史を研究する資料として役立てば幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員をはじめ、関係町教育委員会および同文化財保護委員ならびに土地所有者等関係各位から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申しあげます。

昭和58年３月

岡山県教育委員会

教育長　佐　藤　章　一

例　　言

1．本書は岡山県教育委員会が昭和57年度国庫補助事業を受けて実施した「小阪部・永富遺跡」の発掘調査の概要報告書である。

2．遺跡は阿哲郡大佐町小阪部・永富に所在する。

3．発掘調査は文化課職員中野雅美が担当し、専門委員の指導、助言を得て昭和57年10月25日から昭和58年1月14日まで実施した。

4．本書の執筆・編集は中野が行った。報告書作成にあたっては亀田菜穂子の協力を得た。

5．本書に使用したレベル高は海抜からの高さである。方位は磁北である。

6．本書第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の50000分の1地形図（勝山）を複製したものである。

目　　次

序
例　言
目　次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 7
第２章　調査の経緯 …… 9
第３章　発掘調査の概要 …… 11
　第１節　遺跡の位置と現状 …… 11
　第２節　調査の方法と概要 …… 11
　　Ａ地点 …… 13
　　Ｂ地点 …… 14
　　Ｃ地点 …… 24
　　遺　物 …… 25
第４章　まとめ …… 28

図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 7
第２図　周辺遺跡図 …… 8
第３図　トレンチ位置図 …… 12
第４図　Ａ－１、８断面図（１／100）…… 13
第５図　Ｂ－13平・断面図（１／100）、溝出土遺物（１／４）…… 14
第６図　Ａ－12平・断面図（１／100）…… 15
第７図　Ａ－13土壙－１平・断面図（１／40）、及び出土遺物（１／４）…… 15
第８図　Ｂ－13土壙２平・断面図（１／40）、及び出土遺物（１／４）…… 16
第９図　Ｂ－13土壙３平・断面図（１／40）、及び出土遺物（１／２、１／４）…… 17
第10図　Ｂ－15断面図（１／100）、及びＢ－11平・断面図（１／100）…… 18
第11図　Ｂ－１平・断面図（１／100）、及び出土遺物（１／４、１／２）…… 19
第12図　Ｂ－６平・断面図（１／100）、及び落ち込みⅠ、Ⅱ出土遺物
　（１／４、１／２）…… 20

第13図　B－2・3・8断面図（1／100）…… 21
第14図　B－5平面図（1／100）、及びB－4平・断面図（1／100）…… 22
第15図　B－7断面図及びB－10平・断面図（1／100）…… 23
第16図　C－2・3断面図（1／100）…… 24
第17図　出土遺物（1）（1／4）…… 25
第18図　出土遺物（2）（1／4）…… 26
第19図　出土遺物（3）（1／4・1／2）…… 27

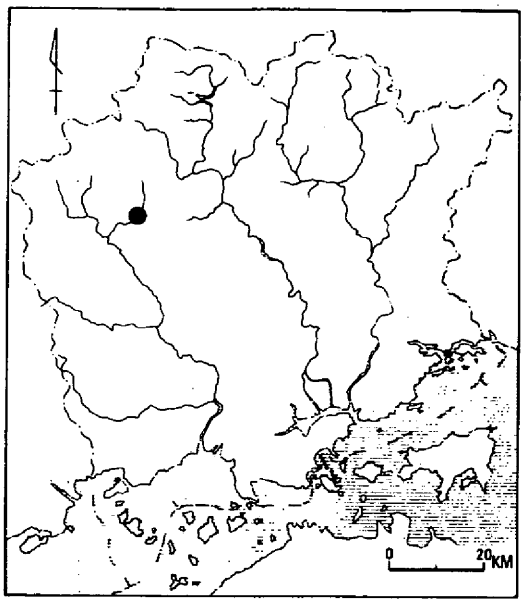
図　版　目　次

図版1－1　遺跡遠景（北から）
　　－2　遺跡遠景（北から）
図版2－1　A－3検出状況（西から）
　　－2　A－8検出状況（南から）
図版3－1　B－13遺構検出状況（西から）
　　－2　B－12遺構検出状況（東から）
図版4－1　B－11遺構検出状況（南から）
　　－2　B－1遺構検出状況（北から）
図版5－1　B－6遺構検出状況（東から）
　　－2　B－4遺構検出状況（西から）
図版6－1　C－2検出状況（北西から）
　　－2　C－3検出状況（南から）
図版7　出土遺物（1）
図版8　出土遺物（2）

第１章　歴史的・地理的環境

遺跡の所在する阿哲郡大佐町は、岡山県の北西部に位置し、東は真庭郡勝山町、西は新見市、南は上房郡、北は鳥取県日野郡に接している。地形的には、吉備高原が中国山地に移り変わっていく位置にある。

中国山地の奥深く、鳥取県境にその源を発する高梁川の支流である刑部川は、急峻な山間部を蛇行しながら南下し、大佐町小阪部で南北約２km、東西約１kmの沖積平地を形成する。さらに、大佐町布勢を通り新見市唐松まで南に流走して高梁川に合流する。



第１図　遺跡位置図

この刑部川によって形成された沖積平地を中心に遺跡が散在する。大佐町内において、現在知られている最も古いものは君山（註１）と中国縦貫道建設に伴って発掘調査された田治部の戸谷遺跡（註２）などで出土した縄文式土器である。一方町内では、旧石器時代の足跡はいまだ確認されていない。弥生時代になると刑部川によって形成された沖積平地を生産基盤にして遺跡の数は増加してくる。小阪部、田治部、布勢を中心に弥生時代中期～後期の集落を営む。特に小阪部の刑部川の東部台地には、天神山遺跡、宮ノ後遺跡、郷尾遺跡、横見遺跡など数多くの遺跡が点在する。

古墳時代の集落址は、いまだ明らかでない。古墳は、古墳時代後期に属するものばかりで、焼田山古墳群、大石古墳群、漆原古墳群などの郡集墳などが知られている。また、漆原古墳群（註３）、円通寺古墳群（註４）は、発掘調査され内部構造や年代などが明らかになっている。

大略古代英賀郡の範囲として、「和名類聚抄」によれば備中国英賀郡として、水田（美郡多）、呰部（安多）、中井（奈加都井）、刑部（於佐加倍）、丹部（多加倍）、林郷の六郷よりなっていることが知られる（註５）。刑部郷は大佐町小阪部、丹部郷は大佐町田治部に比定されている。これら、小阪部、田治部には、奈良、平安時代の遺物は多少認められるものの当時の様相は明らかではない。ただ、戸谷遺跡で、奈良時代の隅丸方形の住居址が１軒検出されている。

また、町内には、室町時代を中心とする潮城、安元城、周防城、円通寺城、割亀山城などが知られている。

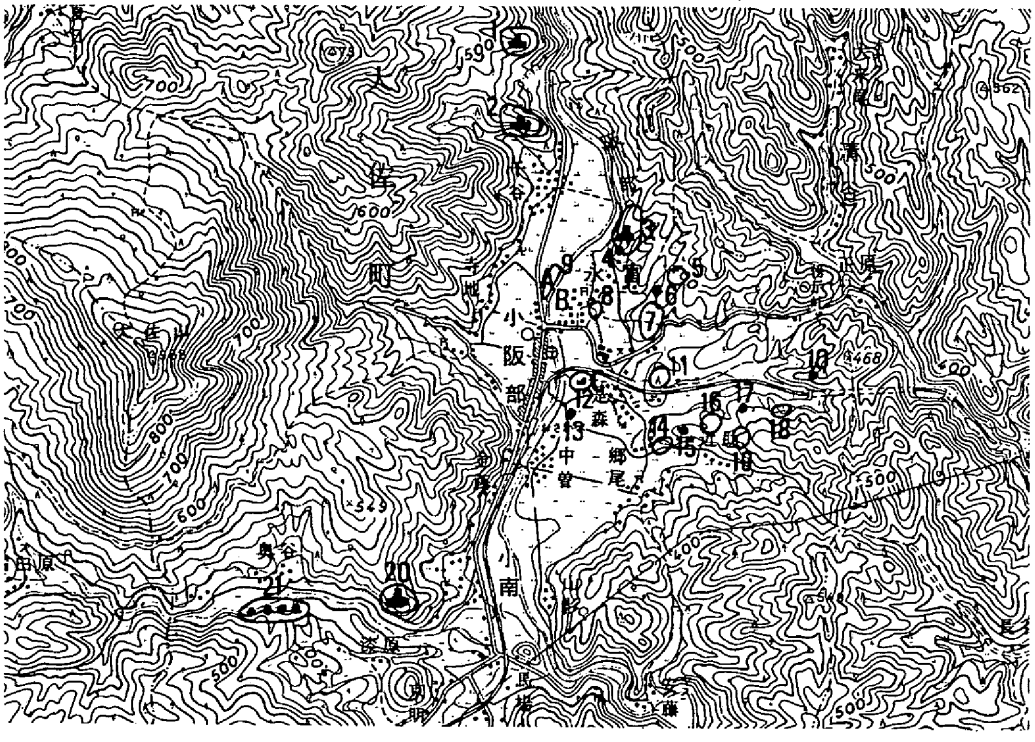
註1 大佐町史　大佐町　1979

註2 橋本惣司『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7』岡山県教育委員会　1976

註3 註1と同じ

註4 田仲満雄『円通寺古墳』大佐町文化財シリーズ第1集　1978

註5 池邊彌『和名類聚抄郷名考證』　1966



1．割亀山城跡　2．矢はぎが城跡　3．円通山城跡　4．円通寺古墳群　5．石臼遺跡
6．石臼古墳　7．天神山遺跡　8．バイパス遺跡（A地点）　9．バイパス遺跡（B地点）
10．神の峯古墳　11．横見散布地　12．塚の元遺跡　13．塚の元古墳　14．郷尾遺跡　15．遊子古墳
16．大寺跡　17．神藷古墳　18．畳田散布地　19．観音堂跡　20．周防城跡　21．漆原古墳群
A・B・C、調査地点

第2図　周辺遺跡図（1／50000）

第2章　調査の経緯

大佐町では、近年農業の近代化、合理化を図る施策である圃場整備事業が実施されている。

小阪部、永富地区でも県営の圃場整備が数年計画で進行されつつある。この地区の事業予定区域には、矢作城関連遺跡や塚の元遺跡が存在する。また、県道新見～勝山線のバイパス建設の際にも遺構の存在が確認されている。

そのため、早急に遺跡の存在、種類、性格、規模等を明らかにして遺跡の保護、保存の対策を構ずる基礎資料を得るため、昭和57年度国庫補助を受けて発掘調査を実施することになった。

発掘調査は専門委員の指導、助言を得て、昭和57年10月25日から昭和58年１月14日まで実施した。調査にあたっては大佐町役場、大佐町教育委員会、大佐町文化財保護委員をはじめ地権者等関係各位には多大のご協力を得た。また発掘作業にあたっては地元住民の方々に協力を得た。記して厚くお礼申し上げます。

調査体制

専門委員

鎌木義昌　岡山理科大学教授

近藤義郎　岡山大学教授

水内昌康　岡山女子看護専門学校教頭

岡山県教育庁文化課

早田憲治　課長

橋本泰夫　課長代理

河本　清　埋蔵文化財係長

田中建治　主任

遠藤勇次　〃

松本和男　文化財保護主査

岡田　博　〃

江見正己　文化財保護主事

中野雅美　〃　（調査担当）

発掘作業員

磯田増己　磯田博文　梶原常雄　山県清太郎　雛田　端

山形秀子　磯田　都　滝野秋子　塚原静代　塚原経子　山県智恵子　山県藤江

日誌抄

昭和57年

10月25日(月) 器材搬入。

26日(火) A－1～3掘り下げ。

27日(水) A－1～3掘り下げ、遺構検出。

28日(木) A－1～3清掃後写真撮影。A－4掘り下げ。

29日(金) A－5、6掘り下げ。

11月4日(木) A－5～7掘り下げ。遺構検出。

5日(金) 遺物整理。

6日(土) A－5～7清掃後写真撮影。A－7拡張掘り下げ。

8日(月) B－1、2掘り下げ。A－7清掃。

9日(火) B－1、2遺構検出。清掃後写真撮影。B－1拡張、B－3掘り下げ。

10日(水) 遺物整理。

11日(木) B－1遺構掘り下げ。B－2～4掘り下げ。

13日(土) B－2、3遺構検出。B－4、5掘り下げ。

16日(火) B－2、6掘り下げ。B－3～4遺構検出後遺構掘り下げ。

17日(水) B－1清掃後写真撮影。B－2、3掘り下げ。B－4、5遺構掘り下げ。

18日(木) B－4、5清掃後写真撮影、B－6、7掘り下げ。

19日(金) B－6遺構掘り下げ。B－7、8掘り下げ。

20日(土) B－6、9遺構掘り下げ。B－7、8掘り下げ、遺構検出。

24日(水) A－1～7清掃。B－9掘り下げ。

25日(木) A－1～7清掃後写真撮影。

26日(金) B－9、10掘り下げ、遺構検出。C－1掘り下げ。

27日(土) B－2、5、7清掃。C－1掘り下げ。

30日(火) C－1掘り下げ、遺構検出。

12月1日(水) B－11、12掘り下げ。

2日(木) B－11、12掘り下げ、遺構検出。

3日(金) B－13、14掘り下げ。T－12拡張掘り下げ、遺構検出。

7日(火) B－13、14掘り下げ。B－12遺構掘り下げ。C－2、3掘り下げ。

8日(水) B－11～13遺構掘り下げ。C－2、3掘り下げ。

9日(木) B－6、12清掃後写真撮影。B－11遺構掘り下げ。C－3、4掘り下げ。

10日(金) B－15、16掘り下げ。B－1、2清掃後写真撮影。

11日(土) B－15、16掘り下げ。C－1～4清掃後写真撮影、断面図作成、埋め戻し。

13日(月) B－14～16清掃後写真撮影。A－8掘り下げ。

14日(火) A－1～7断面図作成後埋め戻し。A－8掘り下げ。

15日(水) A－1～7埋め戻し。A－8掘り下げ。

16日(木) A－8清掃後写真撮影。B－8断面図作成後埋め戻し。

17日(金) B－8埋め戻し。

20日(月) B－7、9断面図作成後埋め戻し。

21日(火) B－7、9埋め戻し。

22日(水) B－6平、断面図作成。B－7埋め戻し。

23日(木) B－1、4、5、11、12、13平面図作成。T－1、2、13断面図作成。B－6埋め戻し。

24日(金) B－1、2、6埋め戻し。

25日(土) B－2、6埋め戻し。

27日(月) B－2埋め戻し。

昭和58年

1月6日(木) B－10平、断面図作成後埋め戻し。

7日(金) B－3～9断面図作成後埋め戻し。

11日(火) B－6～9埋め戻し。B－11～13清掃後写真撮影。

12日(水) B－11～13埋め戻し。B－14～16断面図作成。

13日(木) B－14～16埋め戻し。発掘機材整理。

14日(金) 出土遺物及び発掘機材を岡山に運搬。

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の位置と現状

今回調査した地域は、阿哲郡大佐町小阪部、永富に位置する。中国山地に源を発する刑部川は、急峻な山間部を蛇行しながら南下し、大佐町小阪部で広い沖積平地を形成する。さらに、刑部川は、南に流走し、新見市に本流の高梁川に合流する。

この刑部川によって形成された沖積平地は、南北約２km、東西約１kmにわたる。

この広い沖積平地の中央を刑部川が流れ、西側には安定した微高地が点々と存在することが現地形からも推測され、今までにも遺跡・遺物の発見が報告されている。今回の調査対象地もその刑部川によって形成された微高地上に存在すると考えられる。

遺跡の現状は、大部分が水田であり、一部畑地となっている。冬期には、牧草が蒔かれている個所が多い。しかし、国鉄姫新線の刑部駅を中心とする町並が広がりつつある。さらに近年県道新見～勝山線バイパスが建設されて、その周辺地域は造成地が増えて水田地帯が変容しつつある。

第２節　調査の方法と概要

今回の発掘調査は、圃場整備事業が計画されている範囲内でしかも周知の遺跡及びその周辺地域を対象とした。

調査の都合上、刑部川の西側の矢作城関連遺跡付近をＡ地点、刑部川の東側をＢ地点、さらに大佐中学校付近をＣ地点とした。

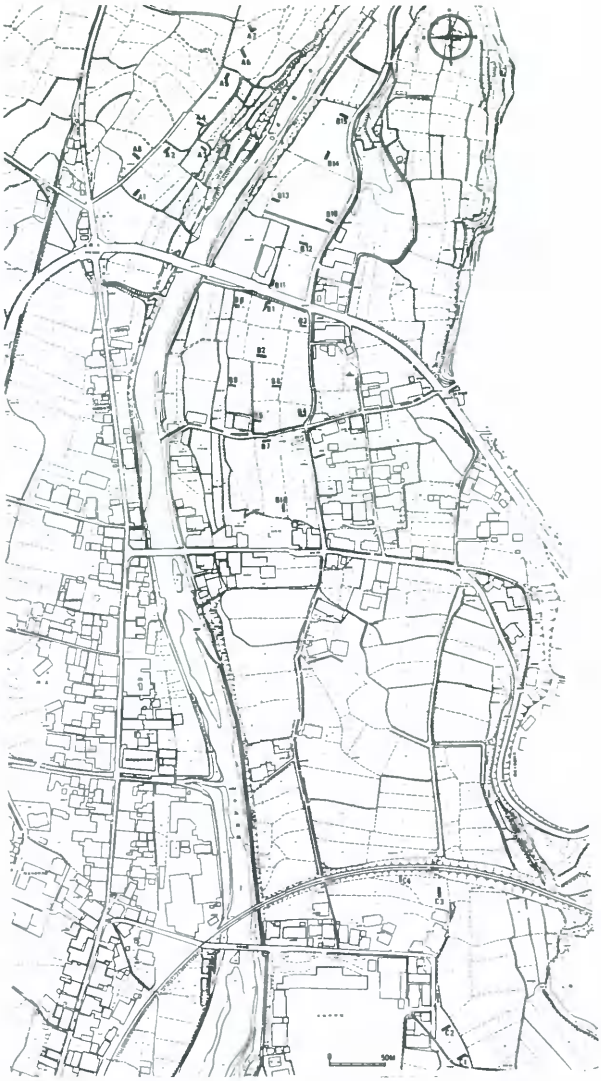
Ａ地点では、城址の存在、範囲の確認に主眼を置いた。

Ｂ地点では、バイパス建設の際に遺構、遺物が確認されていた地点及び地形的に良好な地点の遺跡の存在、範囲等の追求である。

さらにＣ地点は、塚の元遺跡の広がりと微高地の末端部を押えることを主目的とした。

発掘調査は、２ｍ×10ｍのトレンチを基本として掘り進めた。また必要に応じて拡張区を設けた。トレンチは、Ａ地点に８ヶ所、Ｂ地点に16ヶ所、さらにＣ地点に４ヶ所の計28ヶ所を設定した。

検出した遺構は、その遺構の時代、性格をつかむために必要に応じて掘るのを原則とした。近接して同様の遺構を検出した時は、上面で確認するにとどめた。また遺構を検出できない場合は、基盤層まで掘り下げ土層堆積を確認した。



第3図　トレンチ位置図

A地点

この地点は、水田が周りよりも一段高くなっており、中世の城址の推定地である。南側を走るバイパス建設の際には、遺構や遺物が出土している。

トレンチは、城址推定地を中心に８ヶ所を設定し、城址関係の遺構の存在の確認を主目的とした。以下略述を記す。

Ａ－１～７

この地点は、矢作城関連遺跡の推定地で一段高くなった所である。

これらのトレンチでは、耕土の下は10～30cmの石を含む黒灰色土が厚く堆積していた。この層には、土器も包含されておらず自然堆積層と理解した。数ヵ所で確認のためさらに深く掘ってみたが、黒灰色土が20～30cm堆積し、その下層には、大きな石を含む淡黄褐色土層を認めた。

出土遺物は、耕土及び、耕土と黒灰色土の間に部分的に存在する茶褐色泥砂層から、小量の弥生式土器、須恵器が出土した。特にＡ－６、７からは、弥生式土器が少量検出された。またＡ－１から石鏃が出土している。

Ａ－８

ここは、矢作城関連遺跡の西側の堀部であったと推定される地点である。

このトレンチでは、図の様に１～６層まで堆積していた。２～４層から弥生時代から古墳時代の土器が少量出土している。

1．耕土
2．茶褐色泥砂混礫層
3．黒灰色混礫層
4．淡黄褐色砂混礫層

1．耕土
2．暗茶灰色粘土層
3．暗灰色粘土層
4．暗黒灰色粘土層
5．黒灰色砂泥層
6．暗黒灰色土混礫層

第４図　Ａ－１、８断面図（１／100）

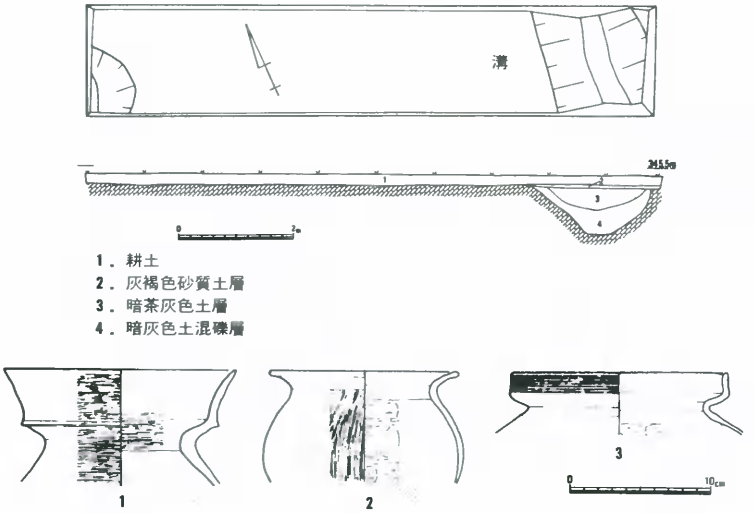
B地点

この地点は、刑部川の東側に当る。トレンチは、16ヶ所を設け遺構は、B－1、4～6、10～14から検出できた。中でもB－1、6、11～14では、耕土直下で安定した基盤層が検出でき弥生時代中期の土壙、古墳時代の溝などの遺構が存在する微高地が広がる　また、B－15、16でも遺構は検出できなかったが、耕土直下で基盤層が確認でき微高地の広がりが想定できる　B－1、6、11～13では、基盤層上面に縄文時代後期の土器が多数検出でき、集落址が周辺に存在する可能性が考えられる　バイパスからB－10の南側にかけては、中世の遺構や包含層が広範囲に存在することが確認できた

B－13

B－12の西、刑部川で侵食を受け段差が生じる西端部に位置する。耕土の下層には、すぐ黄褐色砂土の安定した基盤層が検出できた。遺構は、トレンチ西端に土壙状の落ち込みを、東端に溝を確認した。遺構の残存状態は、耕土直下にもかかわらずよかった。耕土、及び基盤層上面には、縄文時代後期～古墳時代の土器が出土した。

溝　トレンチ東端で南北方向に検出された。幅約180cm、深さ約80cmを測る。溝内には、3、4層がレンズ状に堆積しており、(1～3)など古墳時代初頭の土器が出土した。

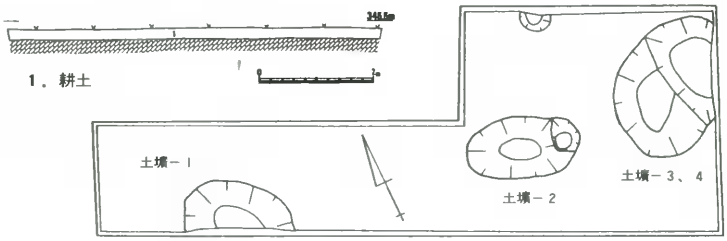


第5図　B－13平・断面図（1／100）、及び溝出土遺物（1／4）

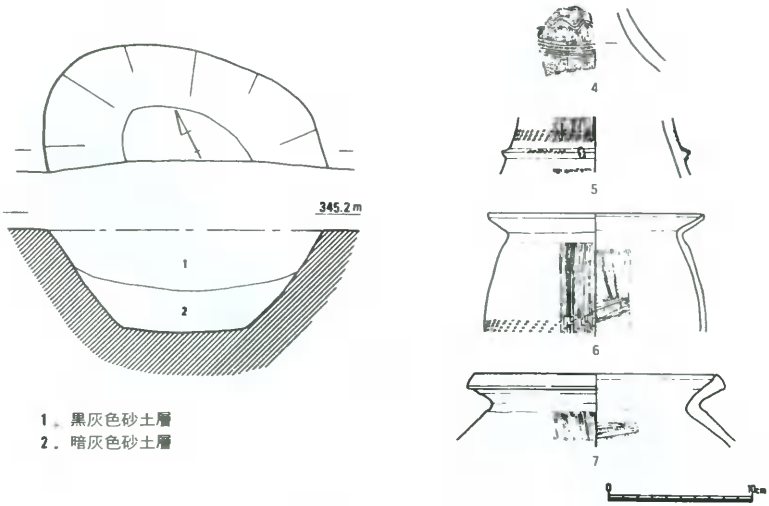
B－12

B－13と同様に耕土直下は安定した基盤層である。遺構は、土壙1～4、柱穴を検出した。出土遺物は、縄文時代後期の土器をはじめ、弥生時代中期・後期などの土器が出土した。また、土製紡錘車の未成品も出ている。

土壙1　トレンチの南側に約半分検出した。形状については、土壙2と同様な楕円形になると考えられる。深さは、約70cmを測る。土壙内は、1、2層とレンズ状に堆積していた。遺物は、(4～7)の弥生時代中期の土器が出土した。



第6図　A－12平・断面図（1／100）

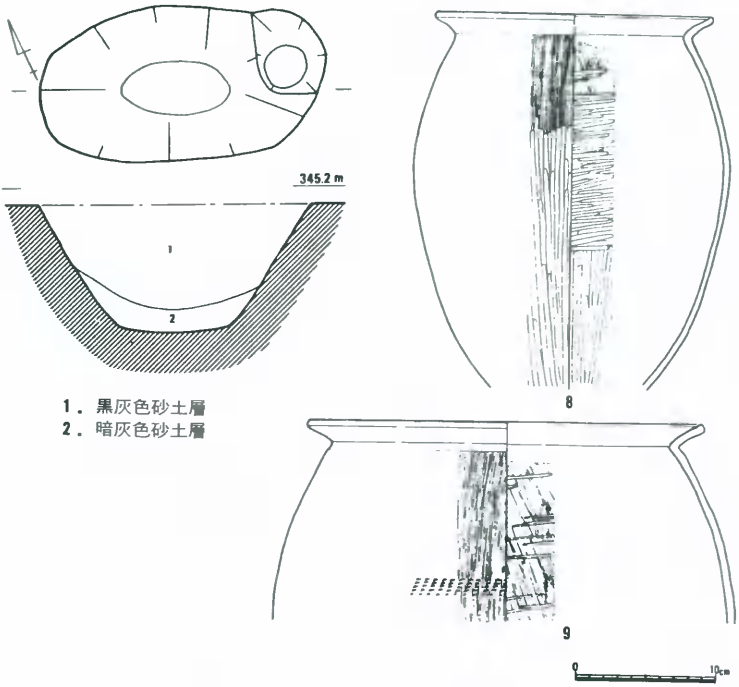


第7図　A－13土壙－1平・断面図（1／40）、及び出土遺物（1／4）

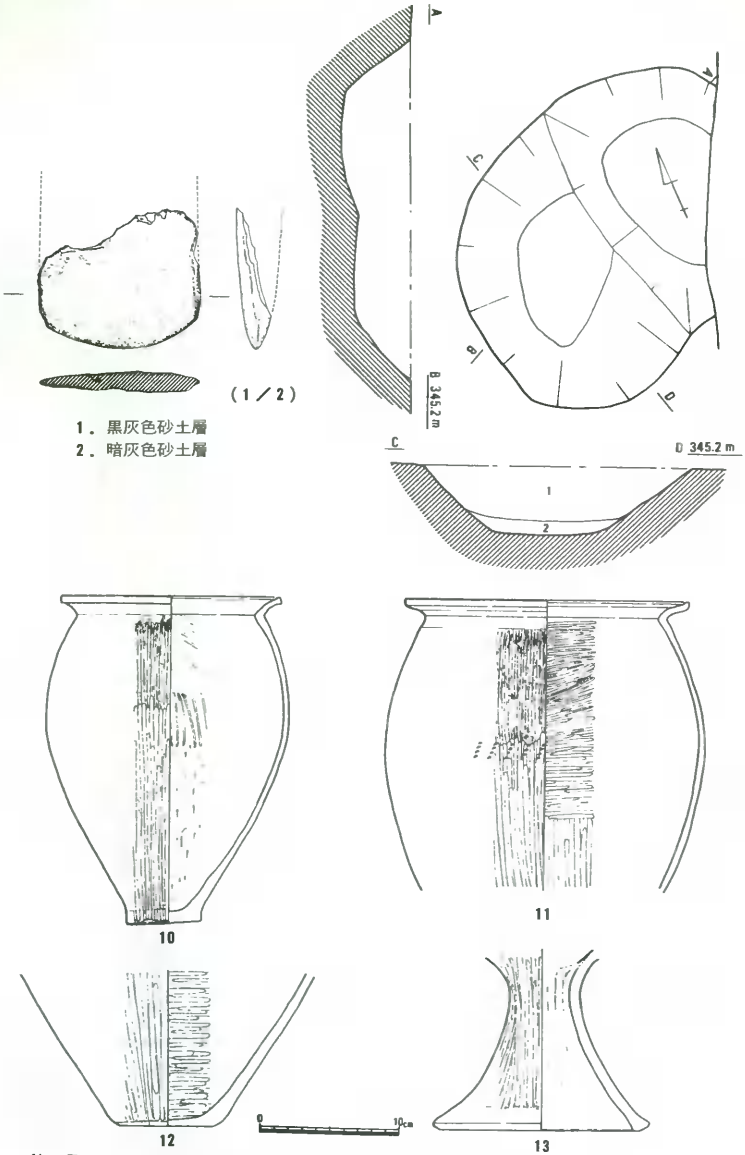
土壙２　土壙１の東側に検出した。一部柱穴によって切られていた。土壙は、195cm×105cmの長楕円形を呈し、深さ約90cmを測り、残存状態のよいものと思われる。土壙内には、図示した甕（８、９）などの土器が出土した。出土した土器は、土壙１出土のものと同時期と考えられる。

土壙３、４　トレンチ西端に検出した。この土壙は、上面ではわからなかったが２基の土壙が切り合っていると考えられる。土壙３は、約190cm×130cmの楕円形を呈し、深さ約50cmを測る。土壙４は、約200cm×約150cmの楕円形に復元できる。深さは、約40cmである。出土遺物は、甕（10～17）、高杯（13）などの土器の外に、磨製石斧の破片が出土した。

これら土壙１～４は、土壙内の堆積状況、堆積土、さらに出土した土器も時期的に差は認められなく、弥生時代中期のものである。土壙の性格については、状況からみて墓壙とは考えがたい。



第８図　Ｂ－13土壙２平・断面図（１／40）及び出土遺物（１／４）



第9図　B－13土壙3、4平・断面図（1／40）及び出土遺物（1／2、1／4）

B－14～16

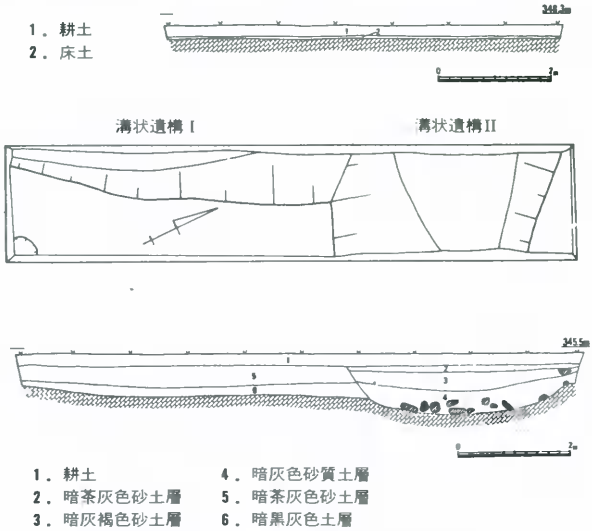
B－11～13と同様に耕土直下に黄褐色砂土の基盤層を確認した。B－14では、溝状の遺構が検出できた。B－15では、遺構が検出できなかったが、安定した基盤層が続いており、この辺まで遺構の存在する可能性がある。土器も弥生時代～古墳時代のものが出土している。B－16でも耕土下に基盤層が検出され、上面より奈良時代の須恵器（56、57）などが出土している。

B－11

バイパスのすぐ北側に設定した。耕土を取ると基盤層が検出でき、溝状遺構Ⅰ、Ⅱ、柱穴などが存在した。耕土中には、縄文時代後期の土器をはじめ弥生時代～中世の土器や鉄滓など多くの出土遺物があった。

溝状遺構Ⅰ　トレンチ北側で東西方向に検出された。幅290～390cmで、深さ、約90cmを測る。遺構内には、室町時代の土器などが出土した。最下層には、河原石が多く認められほとんどの石が火を受けていた。

溝状遺構Ⅱ　トレンチ西側で南北方向に肩部が検出できた。北側では、溝状遺構Ⅰに切られている。遺構内の堆積には、溝状遺構Ⅰと同様に火を受けた石が混入していた。出土した土器からみて溝状遺構Ⅰとの時期差は、認められない。



第10図　B－15断面図（1／100）及びB－11平・断面図（1／100）

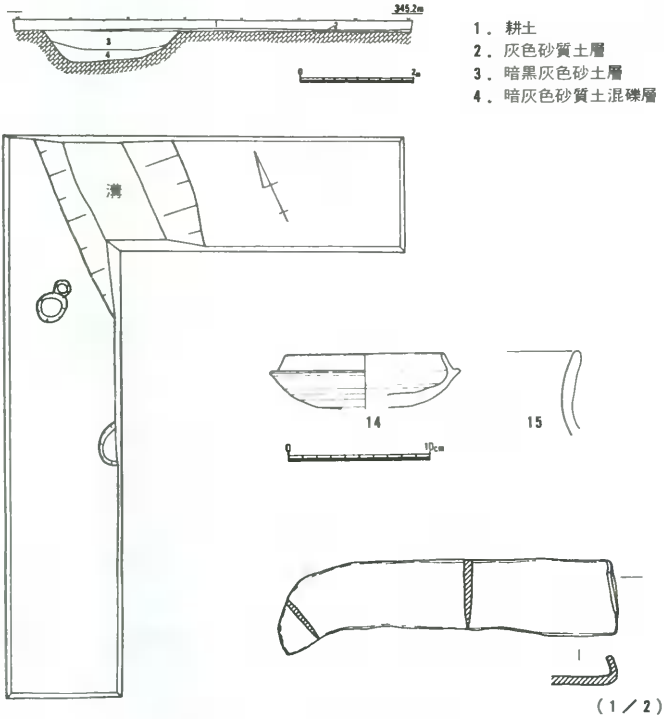
B－1

バイパスのすぐ南側に位置する。1、2層を取ると安定した黄褐色砂質土の基盤層が確認され、これも微高地上に当る。遺構としては、溝、柱穴が検出された。溝の規模を知るため東に拡張区を設けた。

柱穴は、いずれも20～40cmの深さで、溝に沿うように検出され溝に伴う可能性が考えられる。

出土遺物は、1、2層に縄文式土器をはじめ弥生式土器、須恵器、土師器、中世土器が出土した。特に縄文時代後期の土器は、基盤層の上面や凹部に多く認められた。

溝　幅は約230cm、深さ約50cmを測る。ほぼ南北方向に流走する。溝内からは、6世紀後半の須恵器の杯身、土師器の甕などが出土した。また、出土土器と同時代の特徴をもつ鉄鎌も1本検出された。



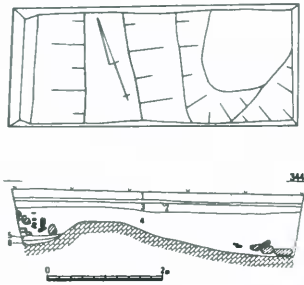
第11図　B－1平・断面図（1／100）及び出土遺物（1／4、1／2）

B－6

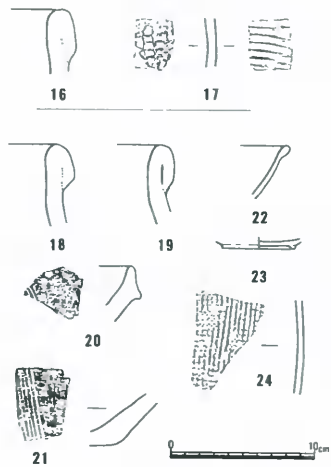
B－1の西に位置する。B－1で耕土直下に検出された基盤層は、やや西に向かって傾斜している。2、3層では、中世の土器を中心に縄文式土器、弥生式土器などが出土している。3層の下層では、落ち込みⅠ、Ⅱの遺構が検出された。

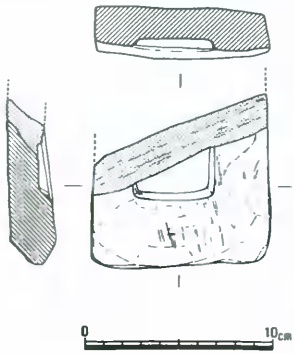
落ち込みⅠ　全容が明らかでないので性格は不明である。トレンチの南側で立ち上がるものと思われる。遺構内の底部には、河原石が多く認められた。出土遺物は、16、17など中世の土器を多く出土した。

落ち込みⅡ　トレンチ西側に一部検出した。性格については不明である。遺構内には、角楽が多く認められ、その間に備前焼、青磁などが出土（18～24）した。また硯の破片も検出された。出土遺物からみて落ち込みⅠと同様に室町時代の時期を示す。



1．耕土
2．灰色砂質土層
3．淡茶灰色砂質土層
4．暗茶灰色砂土層
5．暗黒灰色砂土層
6．暗灰色砂土層





第12図　B－6平・断面図（1／100）、及び落ち込みⅠ、Ⅱ出土遺物（1／4、1／2）

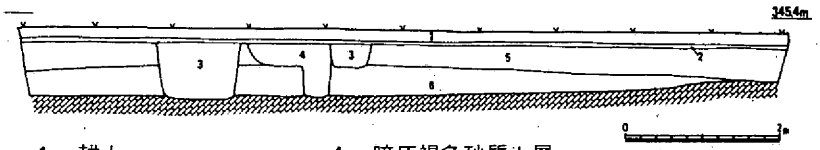
B－2、3

B－1では、安定した基盤層が耕土直下で検出されたが、B－1の西側のB－3、南側の2では、包含層が約50～90cmの厚さで堆積しており、基盤層は水田下60～80cm検出される。

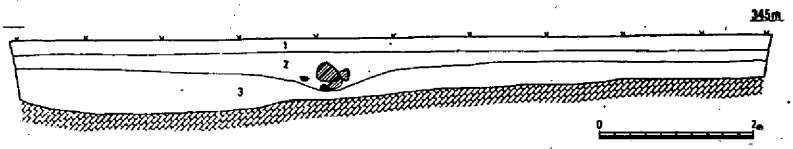
B－15からB－1に存在した安定した微高地は、B－1から南及び西に下がることが明らかになった。B－2では、一部現代の土壙で攪乱を受けていたが、耕土～基盤層の間には、中世の土器を中心に弥生時代～古墳時代の土器が数多く出土した。また、出土遺物の中には、鉄滓、支脚、さらに火を受けた石などがあり、付近に鍛冶炉のあった可能性が考えられる。B－2もB－3と同じような様相であった。

B－7、9

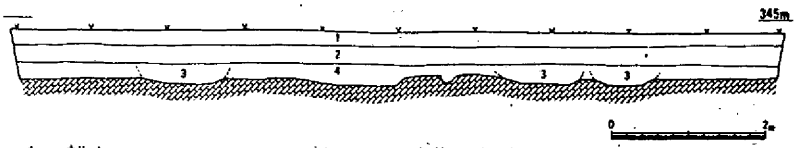
B－2とB－4の間に設定した。包含層が厚く堆積していた。しかし、掘り下げる過程では確認できなかったものの、断面の状況からなんらかの遺構の存在が考えられる。B－7の北側の北側のB－4、5では、基盤層上層にも中世以降の遺構面が存在することなどから、2、4層の上面が遺構面になる可能性がある。2、4層には、B－2、3と同様に中世の土器を包含している。B－7でも同様であった。



1．耕土
2．灰色砂質土層
3．現代
4．暗灰褐色砂質土層
5．暗茶灰色砂泥層
6．暗灰色砂泥層



1．耕土
2．茶灰色三色砂層
3．暗茶灰色砂質土層



1．耕土
2．茶灰色泥砂層
3．4．暗茶灰色砂質土層

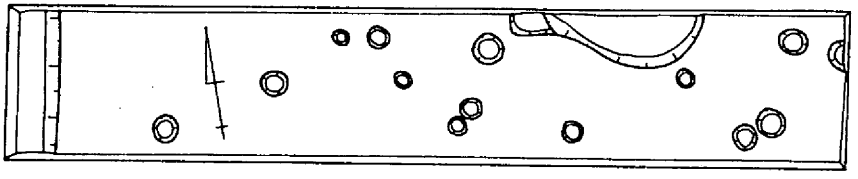
第13図　B－2、3、8断面図（1／100）

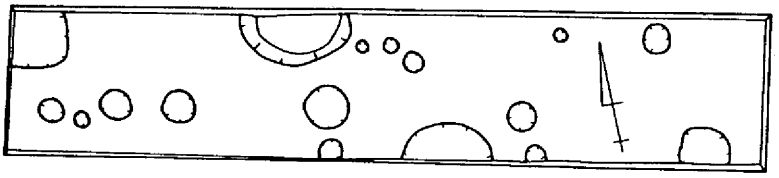
B－5

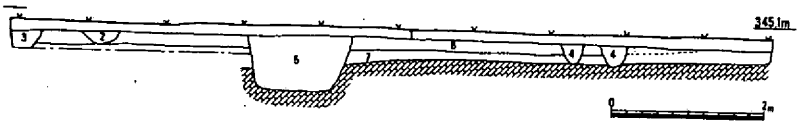
このトレンチの直ぐ南側の道路は、江戸時代の旧道であることから、当時の屋敷跡などを予想していた。調査の結果、耕土直下に柱穴群を検出した。柱穴は、いずれも径約20～40cmのもので、深さは20～30cmの程のものである。トレンチでは、柱穴の纏まりはつかめなかった。柱穴内には、遺物はほとんど無く時期は不明である。また、トレンチ西端に雨落ち溝を想起させる落ちを確認した。なお、北壁にある土壙は現代の攪乱である。このトレンチでは、柱穴群が検出されたため下層の遺構、堆積状況については追求しなかった。

B－4

B－5の西側に設定したトレンチである。ここでも耕土直下には、B－4と同様に、土壙、柱穴等が検出できた。B－4と性格が同じ様な遺構だったため、上面で確認したに留まった。ここでは、堆積状態を知るため北壁際に側溝を入れた結果、遺構面になっている6層には中世の土器が包含していた。6層の下層の7層も同様であった。7層の下には、基盤層が確認された。基盤層は、トレンチ東端では水田下約30cmで、西に向って途々に下がっていく。なお、北壁際の土壙は、現代の攪乱である。







1．耕土
2．茶黄色砂層
3．暗灰色泥砂層
4．黒灰色混砂層
5．現代土壙
6．暗灰褐色砂質土層
7．茶灰色砂質土

第14図　B－5平面図（1／100）、及びB－4平・断面図（1／100）

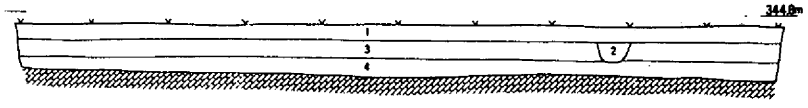
B－7

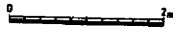
B－5の道を隔てた南側に位置する。基盤層は、水田面から約60cm下で確認できほぼ水平である。基盤層の上は、2、3層とほぼ水平堆積を示す。遺構は、耕土直下の3層上面で南北方向の幅約40cm、深さ約25cmを検出したに留まった。出土遺物はなかった。2、3層からは、室町時代を中心とする中世の土器が出土した。2、3層には、出土遺物からみて時期差は認められなかった。

B－10

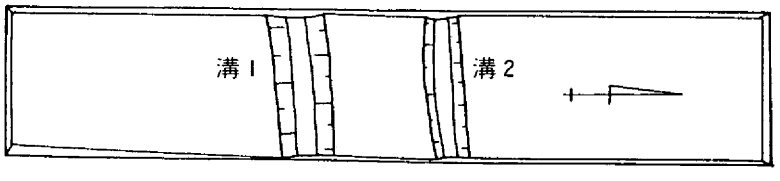
B地点の南端のトレンチである、2層の中世包含層の下層で、トレンチ中央に溝1、2を検出した。また、南側、北側に3、9層が複雑に堆積している。11層にも中世の土器が確認できた。基盤層は、溝の検出面で止めたので、側溝でも確認し得ていない。

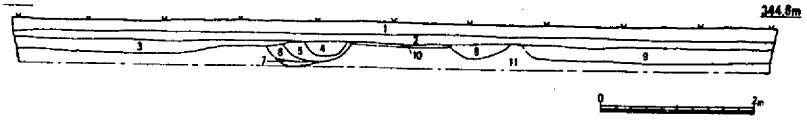
溝1、2　これらの溝は、ほぼ東西方向に平行して検出した。溝1は、断面を観察すると数回に渡り掘り直しが行われている。溝2は、幅約80cm、深さ約20cmを測る。溝1、2とも出土遺物はなく時期は不明である。





1．耕土
2．灰色砂質土層（溝）
3．暗灰色砂土層
4．暗黒灰色砂土層





1．耕土
2．黄灰色土層
3．暗茶灰色泥砂層
4．黄灰色砂層
5．暗灰色砂質土層
6．灰褐色砂層
7．灰色微砂層
8．黄灰褐色砂層
9．暗茶灰色砂質土層
10．茶灰褐色泥砂層
11．暗茶褐色土層

第15図　B－17断面図（1／100）及びB－10平・断面図（1／100）

C地点

この地点は、大佐中学校の東及び北東に当る。大佐中学校では、かつて校舎の建て替えの際に弥生時代の住居址等が確認されている。（塚の元遺跡）

そのため、今回の調査では塚の元遺跡の広がりを確認することを目的とした。トレンチは、いずれも、微高地上に当ると思われる地点に設定した。

C－1、2

大佐中学校の東側に位置する。すぐ東側の水田とは、70～80cmの段差があり、一段高くなっている。微高地の東端に当る地点と予想された。

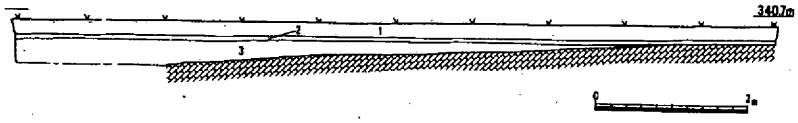
調査の結果、C－1、2には遺構は認められなかった。堆積状況は、耕土の下に数cmの茶褐色土が堆積する。その下層では、トレンチ西側で茶褐色土（基盤層）が検出でき、途々に東側に下がっていく。トレンチ西側では、基盤層の上に黒灰色土が基盤層に沿って東に厚く堆積していく。

出土遺物は、茶褐色土、黒灰色土から弥生時代～中世の土器が出土している。

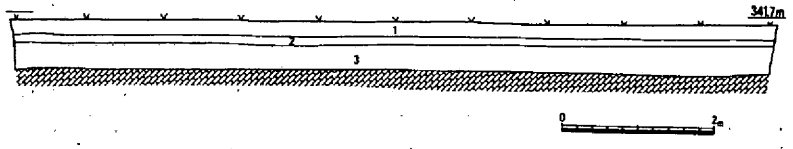
C－3、4

国鉄姫新線の北側に位置する。C－3、4とも遺構は、検出されなかった。堆積状況は、耕土、暗茶褐色土、黒灰色土、黄褐色土（基盤層）である。暗茶褐色土、黒灰色土からは、弥生式土器、須恵器、備前焼など弥生時代～中世の土器が出土している。

以上のようにC－1～4では、遺構は検出できなかったが、弥生時代～中世の土器を包層する堆積層は認められるため、周辺には遺構の存在が考えられる。



1．耕土
2．灰色砂質土層
3．暗黒灰色砂泥層



1．耕土
2．暗茶灰砂泥層
3．暗黒灰色砂泥層

第16図　C－2、3断面図（1／100）

遺物

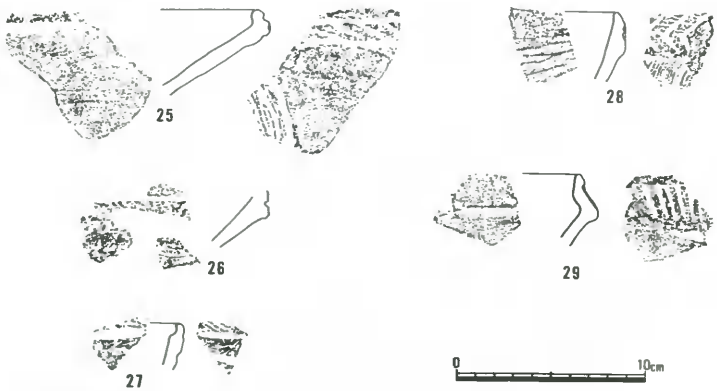
今回の調査では、遺跡の範囲確認が主目的だったため、出土した遺物はそう多くはない。図示した45～65の土器や石器、土製品は、耕土及び、包含層掘り下げの際に出土したものである。出土遺物は、図示できるものは少なかったが、多岐にわたる時期のものが検出できた。

今回の調査で注目されたのは、B－1、6、11、12などで出土した縄文時代後期の土器（25～29）である。石鏃1は、黒曜石でB－6から出土した。以後、弥生時代中期・後期の遺物（50～53）は、B－12を中心に確認している。また、図示できなかったが、A地点からも弥生時代後期の土器や石鏃2が検出されている。古墳時代の遺物は、A、B、C各地点から小量ながら出土している。

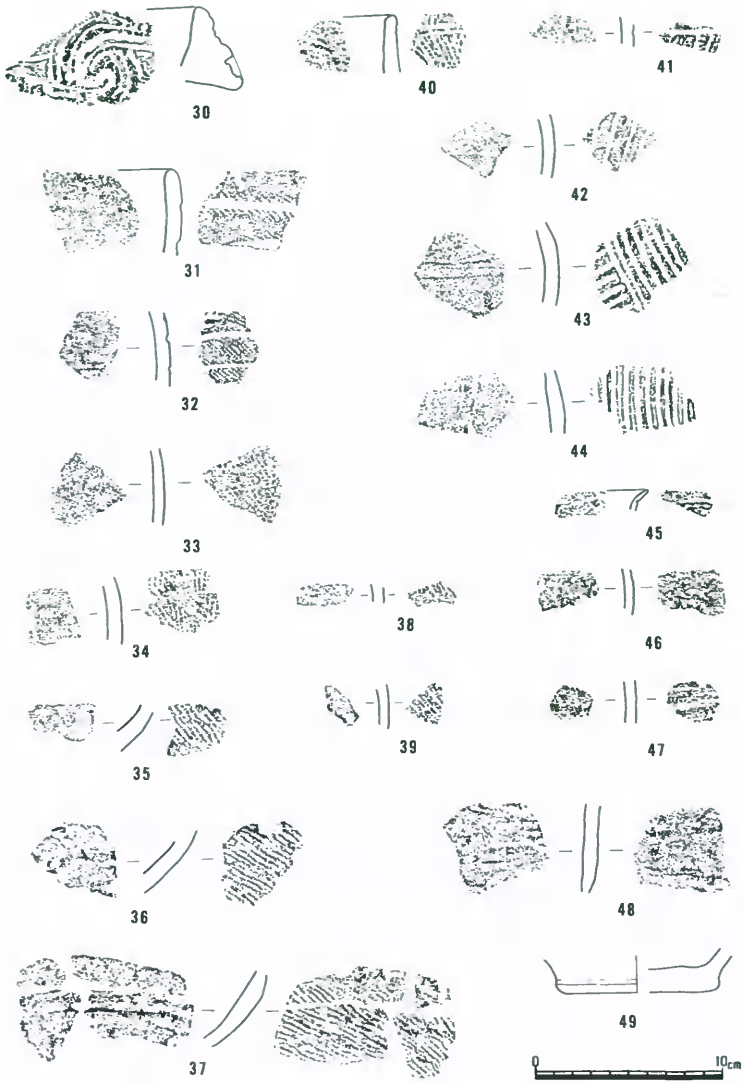
次に奈良時代の土器（54～57）は、B－2、16などで須恵器の杯や、土師器の杯、甕などが検出されている。中世の遺物は、今回の出土遺物の中で一番多量に出た。中世の土器は、やはり遺構の集中するB地点が中心でA、C地点でも少量認められた。土器は、備前焼（58、61～64）、亀山焼系土器（65）、早島式と称される土師器の椀（66）、さらに青磁（68）も小量ながら出土している。なお、59の土器は兵庫県の魚住窯址（註）で焼かれたものと類似する。

今回中世の土器は、数多く検出されたがその中心は、室町時代のものが中心であった。

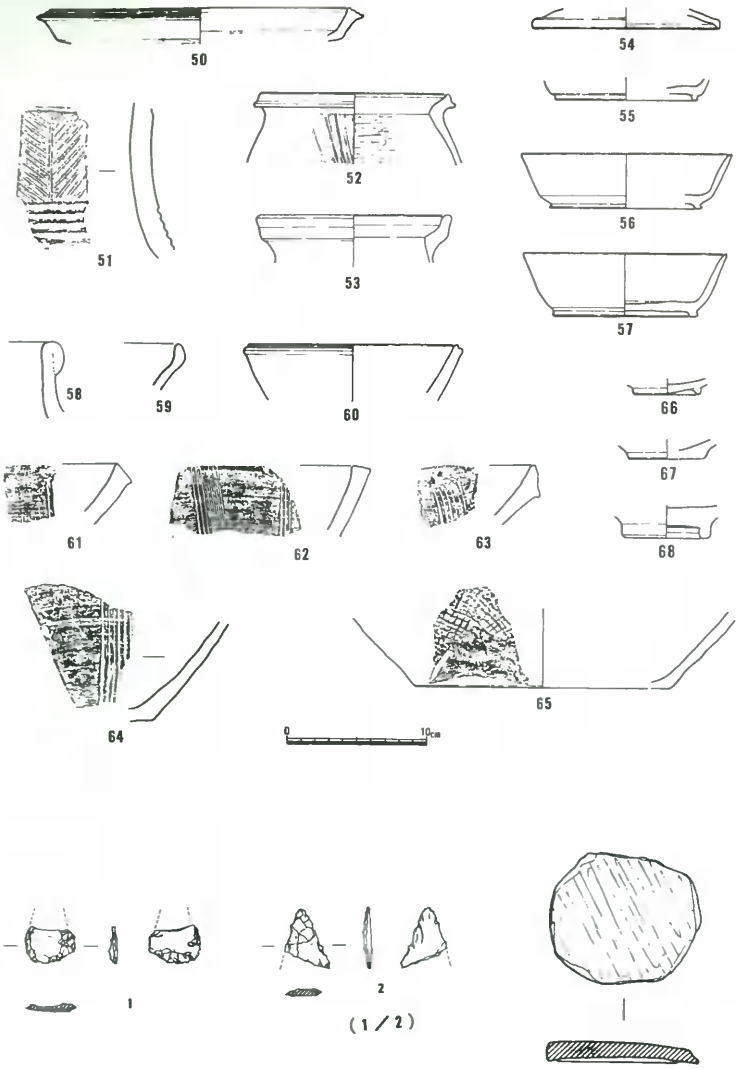
註　大村敬通、伊藤晃　日本のやきもの集成9　山陽　1981



第17図　出土遺物（1）（1／4）



第18図　出土遺物（2）（1／4）



第19図　出土遺物（3）（1／4、1／2）

第4章　まとめ

今回の小阪部、永富地区の調査は、A、B、Cの各地点に計28のトレンチを入れることによって、遺跡の範囲、内容についてより具体的に把握することができた。発掘調査の結果、刑部川によって形成された刑部平地には、約40,000㎡におよぶ遺跡の存在が明らかになった。ここでは、各地点の結果に若干の説明を加えて、まとめにかえたい。

刑部川によって形成された沖積平地の東側は高低二段の段丘地形が発達している。この高位段丘の永富、横見、是森、郷尾などの台地上には、弥生時代の遺跡が数多く存在する。縄文時代の遺跡の立地としても好位置であると思われるのにもかかわらず、現在までまだ明らかになっていない。今回の調査では、刑部川と高位段丘の間の低位段丘に安定した（微高地）自然堤防が確認でき、縄文時代後期の土器片が数十片出土したことにより、この微高地上に遺構の存在する可能性は高い。岡山県北西部においては、断片的に遺物の出土が知られているものの遺構が明らかになっている例は少ない。いずれにしろ刑部川東岸の永富地区には、縄文時代からの遺跡が存在することは否定しがたい。

この縄文式土器が出土した微高地は、バイパスの南30ｍから北約200ｍにおよび、弥生時代中期～古墳時代後期にわたる遺構、遺物の検出をみた。このような刑部川の低位段丘に立地する遺跡としては、大佐中学校を中心とする微高地が知られていたにすぎなかった。しかし、刑部川東岸の低位段丘には、現地踏査や航空写真などからの知見では、旧河川が蜘蛛の巣状に入りこみ、その間に微高地が連綿と連って存在している様子が窺えた。前記したように小阪部、永富地区では、弥生時代などの遺跡は、高位段丘の台地上に多くの遺跡がみつかっており、集落の中心と考えられていたが、今回の調査で低位段丘にも相当数存在することがわかった。

なお、刑部川西岸の低位段丘では、少量の弥生時代後期の土器が出土したが、明確な遺構、包含層は検出できなかった。また、矢作城址については、城址に関連するものはつかめなかった。

一方、矢作城址対岸の永富の低位段丘には、矢作城址が存続していたであろう室町時代を中心とする中世の遺構が顕著に確認された。この中世の遺構の拡がりは、永富を中心に刑部川東岸の低位段丘に広範囲にわたり存在する。

図版 1

1－1　遺跡遠景（北から）

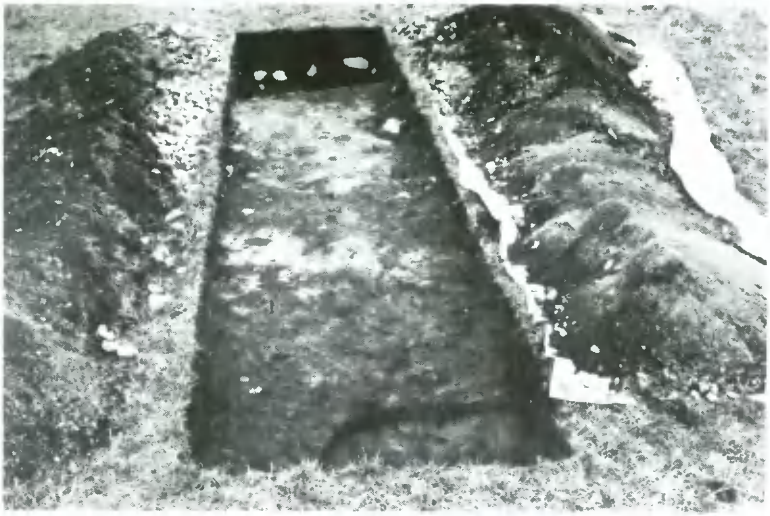
1－2　A地点全景（北から）

図版 2

2－1　　A－3　検出状況（西から）

2－2　　A－8　検出状況（南から）

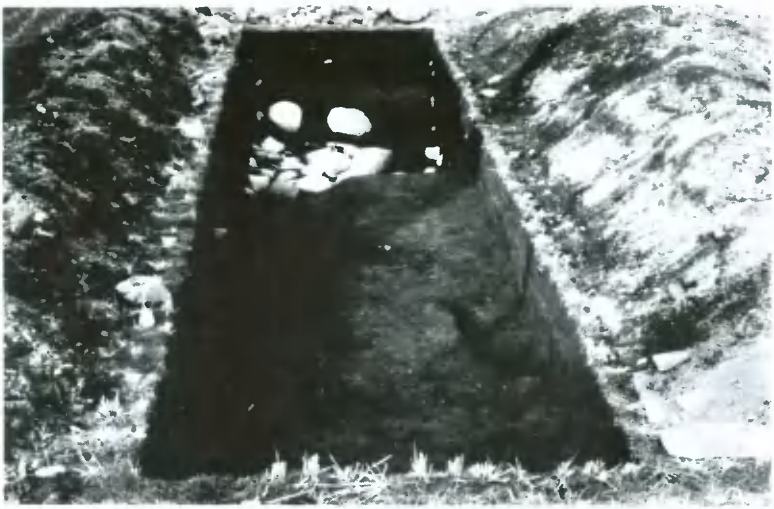
図版 3



3－1　　B－13　遺構検出状況（西から）

3－2　　B－12　遺構検出状況（東から）

図版 4



4－1　　B－11　遺構検出状況（南から）

4－2　　B－1　遺構検出状況（北から）

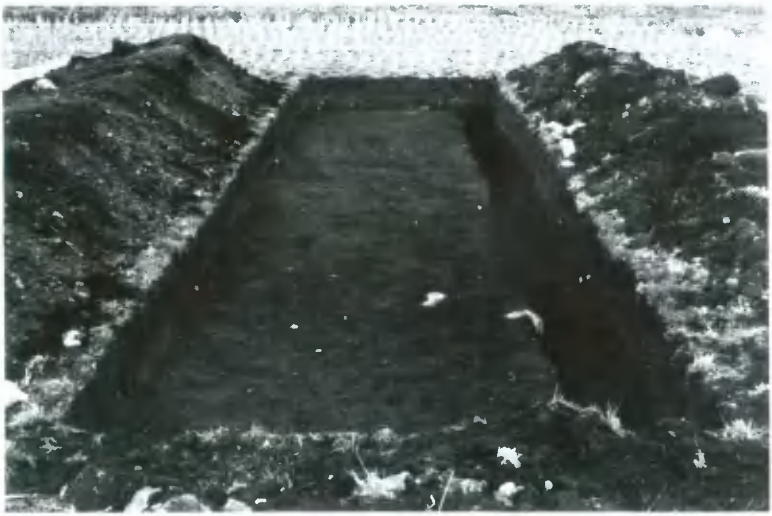
図版 5

5－1　　B－6　遺構検出状況（東から）

5－2　　B－4　遺構検出状況（西から）

図版 6

6－1　　C－2　検出状況（北西から）



6－2　　C－3　検出状況（南から）

図版 7

13

10

8

9

B－1 溝

B－6 落ち込みII

7－1　出土遺物（1）

図版 8

8 — 1　出土遺物 (2)

備中平遺跡

例　　言

1．本書は岡山県教育委員会が昭和57年度国庫補助事業を受けて実施した「備中平（びっちゅうひら）遺跡」の発掘調査の概要報告書である。

2．遺跡は上房郡北房町五名に所在する。

3．発掘調査は文化課職員江見正己が担当し、昭和57年11月8日から昭和58年2月8日まで実施した。

4．本書の執筆・編集は江見が行った。

5．本書に使用したレベルの数値は海抜高である。方位は磁北である。

6．本書第3図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25000分の1地形図（呰部）を複製・縮尺したものである。

目　次

例　言
目　次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 41
第２章　調査の経緯 …… 44
第３章　発掘調査の概要 …… 46
　第１節　遺跡の位置 …… 46
　第２節　調査の方法と概要 …… 48
第４章　まとめ …… 60

図　目　次

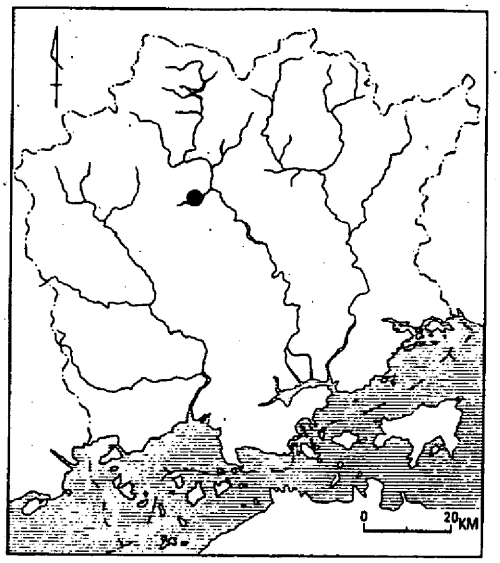
第１図　遺跡位置図 …… 41
第２図　北房町の主要遺跡 …… 42
第３図　備中平遺跡の周辺遺跡図 …… 46
第４図　トレンチ位置図 …… 47
第５図　Ａ調査区土層断面図（１／80） …… 48
第６図　Ｔ－２拡張区全体図（１／200） …… 49
第７図　住居址平・断面図（１／60）及び出土遺物（１／４） …… 50
第８図　建物Ⅰ、Ⅱ平・断面図（１／80） …… 51
第９図　Ａ調査区出土遺物（１／４） …… 52
第10図　Ｂ・Ｃ調査区平・断面図（１／80） …… 55
第11図　Ｄ調査区平・断面図（１／80） …… 56
第12図　Ｅ・Ｆ調査区平・断面図（１／80） …… 57
第13図　Ｂ～Ｆ調査区出土遺物（１／40） …… 59

図 版 目 次

図版１	１－１	Ａ・Ｂ調査区遠景（北東から）
	１－２	Ｄ調査区近景（東から）
	１－３	Ｅ・Ｆ調査区近景（東から）
図版２	２－１	Ｔ－２拡張区遺構検出状況（西から）
	２－２	Ｔ－２拡張区住居址検出状況（東から）及び遺物出土状況（南から）
図版３	３－１	Ｔ－２拡張区建物Ⅰ検出状況（西から）
	３－２	Ｔ－２拡張区建物Ⅱ検出状況（西から）
図版４	４－１	Ｔ－７遺構検出状況（南から）
	４－２	Ｔ－８遺構検出状況（東から）
図版５	５－１	Ｔ－９斜面堆積状況（南東から）
	５－２	Ｔ－12遺構検出状況（北から）
図版６	６－１	Ｔ－29遺構検出状況（北から）
	６－２	Ｔ－30遺構検出状況（西から）
図版７	７－１	Ｄ調査区五輪塔集積地（東から）
	７－２	Ｄ調査区西　山田古墳（南東から）
図版８		出土遺物

第１章　歴史的・地理的環境

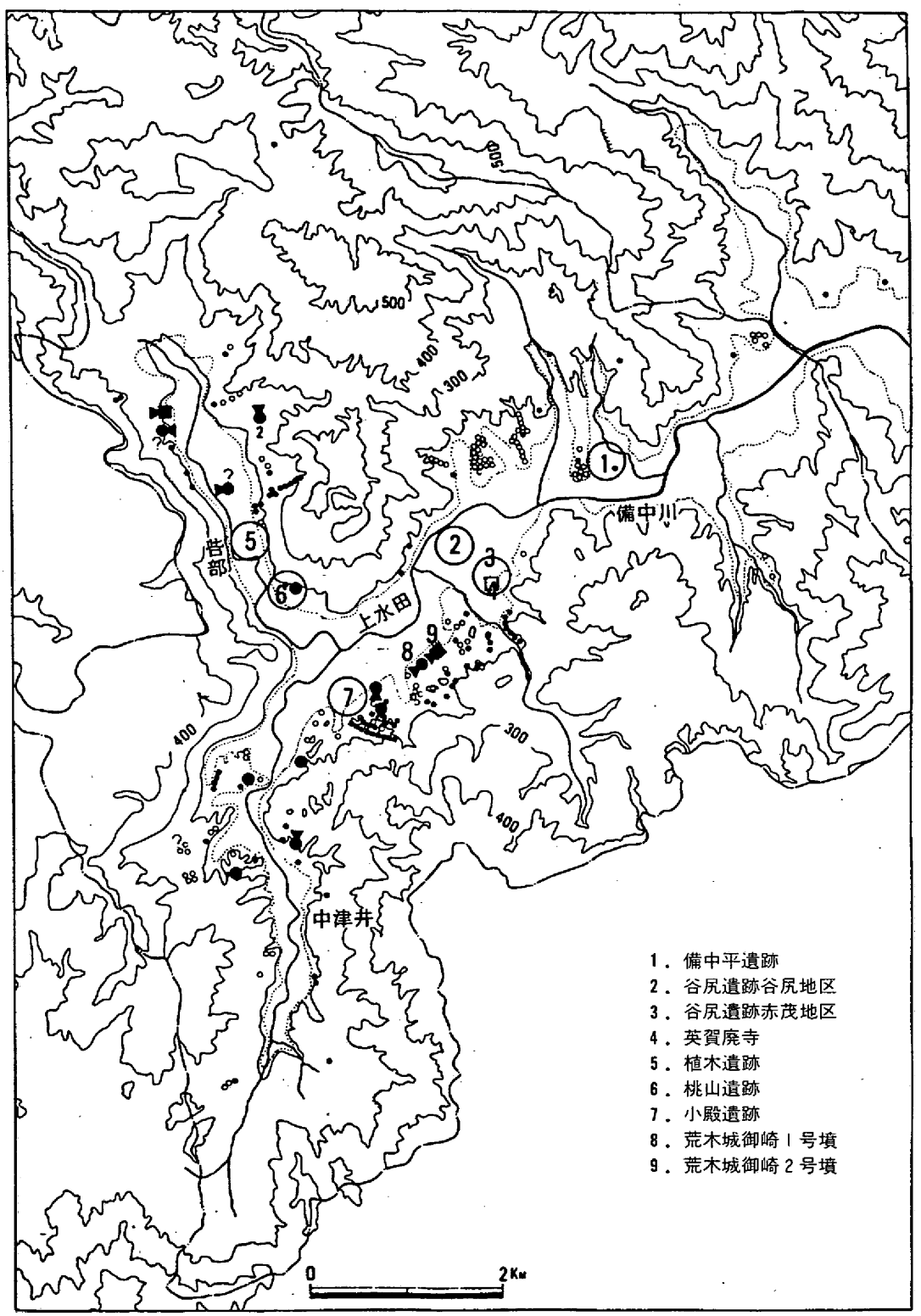
備中平遺跡は岡山の中北部にある上房郡北房町五名に所在する。付近一帯は石灰岩地帯で、北房町から新見市にかけては石灰岩の採掘場が多く見られる。また、北房町の西、新見市の南部には阿哲台地と呼ばれている石灰岩地形が見られる。この阿哲台地の豊永付近にはカルスト台地としての地形が見られ、さらに西へ拡がり、広島県東城町の帝釈峡へと続く。



第１図　遺跡位置図

この石灰岩地帯の間を旭川の支流の一つである備中川が流走しており、北房町内においては、呰部を中心とする地域と上水田を中心とする地域に一定の広さとまとまりをもった平地が形成されている。さらに、備中川の支流になる中津川により開析された地域とを合せた地域が、この一帯の中心地を形成している。北房町内で現在までに知られている遺跡は、その大多数がこの周辺に存在しており、それらの遺跡は、この平地を生活の場とした人々によって残されたものである。

北房町内において現在知られている最も古い遺物を出土した所は、中国縦貫道建設に伴って調査された備中平遺跡（註１）、谷尻遺跡（註２）、空古墳盛土内（註３）などで、ここから楕円及び山形の押型文の土器が出土しており、縄文時代早期まで遡ることが出来る。以後、縄文時代の遺跡は早期から晩期までの遺構遺物を検出した谷尻遺跡をはじめ、前期及び後期の桃山遺跡（註４）、同じく前期の遺構物を出土した備中平遺跡などがあげられる。これら縄文時代早期～後期の遺構、遺物は非常に希薄状態であるのに対し、縄文時代晩期になると遺物の出土量が急増する傾向をしめしている。谷尻遺跡では爪形文を主体にする土器をもつ土壙や、遺跡の北東部分の堆積土中から多くの遺物を出土している。また、遺跡の西方には突帯文土器が出土した地蔵ヶ渕洞穴遺跡（註５）や、落合町ではあるが、貯蔵穴を42基も検出した宮の前遺跡（註６）などが知られている。これらのことは、晩期には美作北西部と備中北東部に比較的共通の生活手段が開拓、実施された可能性を考えさせる。縄文時代晩期に続く弥生時代前期の遺跡は現在のところ僅かに谷尻遺跡において数片の土器が出土しているだけであり、新たな遺



第2図　北房町の主要遺跡

跡の拡がりは確認されていない。しかしながら中期～後期になると約60基の土壙墓群を検出した谷尻遺跡をはじめ、町内には10数遺跡知られている。

古墳時代に入ると集落の数はさらにふえるとともに、低位段丘を見おろす丘陵上には数多くの古墳が存在している。中でも、北房町内で最も広く開けた上水田の南の丘陵上には、この地域最古と考えられる全長40ｍの前方後円墳である荒木城御崎２号墳をはじめ、全長60ｍの前方後円墳である同１号墳や、帆立貝式の前方後円墳と考えられる立３号墳などがある。以後北房町内には上水田及び呰部、中津井の３地域を中心にして古墳群が展開している。

歴史時代に入ると法起寺式あるいは観世音寺式の伽藍配置と考えられる英賀廃寺（註７）が上水田に建立されている。廃寺は白鳳期に建立され平安時代まで存在したと考えられるが、この廃寺南西約２kmには郡衙に推定されている小殿遺跡が所在し、北東約1.5kmには備中平遺跡が所在し、奈良時代から中世に至る建物群が検出されている。中世の遺跡は他に谷尻地区からも多くの建物群が検出されている。このように、北房町上水田の一帯は、古墳時代～中世にかけて、備中北部において一大発展をとげた地域である。

註１　田中満雄・井上弘「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　岡山県教育委員会　1976

註２　高畑知功・山磨康平・井上　弘他「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査』11　岡山県教育委員会

註３　田仲満雄　「空古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976

註４　田仲満雄　「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　1976

註５　北房町川崎地蔵ヶ渕穴入口で採集されている。

註６　二宮治夫・浅倉秀昭他「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　岡山県教育委員会　1976

註７　平井　勝　「英賀廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』38　岡山県教育委員会　1980

第２章　調査の経緯

備中平遺跡は中国縦貫道建設のために昭和47年にその一部が発掘調査され、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかにされている。その後北房町はこの遺跡が所在する山田地区一帯を圃場整備する計画をたてた。計画にあたって町部局は町教委に遺跡の取り扱いについて協議を行なった所、町教委は備中平遺跡の調査は既に完了しているものとして解答していた。筆者は昨年度の国庫補助事業である谷尻遺跡赤茂地区を調査している際、このことを耳にしたため北房町に対して発掘届の提出を求め、県教委と再度協議した。この結果早急に遺跡全体の規模、時期等を明らかにして遺跡の保護・保存の措置を講ずるため、昭和57年度国庫補助を受けて発掘調査を実施することになった。なお圃場整備は昭和57年度から実施しており、Ａ調査区（後述）が、工事工程との関係で早急に対応せざるを得ない状況にあったため、一部拡張して発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和57年11月８日から昭和58年２月８日まで実施した。調査にあたっては北房町役場、北房町教育委員会、北房町文化財保護委員をはじめ地権者等関係各位には多大のご協力を得た。記して厚くお礼申し上げます。

調査体制

岡山県教育庁文化課

課長　早田憲治　　課長代理　橋本泰夫　　埋蔵文化財係長　河本　清

主任　田中建治　　主任　遠藤勇次　　文化財保護主事　江見正己（調査担当）

調査作業員

大塚真一　坊　正男　山根一郎　大恵澄代　大平厚子　鈴本キヨコ　丸山絹子　山本ミネ

日誌抄

昭和57年

11月８日(月)　発掘機材の搬入。Ｔ－１掘り下げ。

９日(火)　Ｔ－１、２、３掘り下げ。

11日(木)　Ｔ－３、４、５掘り下げ。

12日(金)　Ｔ－５、６掘り下げ。Ｔ－２、４写真撮影。

13日(土)　Ｔ－５、６掘り下げ。Ｔ－１、５、６写真撮影。

17日(水)　Ｔ－２～６の平板実測及び断面図作成。Ｔ－７掘り下げ。

18日(木)　Ｔ－７～９掘り下げ。

19日(金)　Ｔ－２拡張区掘り下げ。Ｔ－７～９写真撮影。Ｔ－８、９平板実測。

20日(土)　Ｔ－２拡張区掘り下げ。Ｔ－７平板実測。Ｔ－７～９断面図作成。

24日(水)　Ｔ－２拡張区、遺構検出作業。

～

27日(土)

30日(火)　Ｔ－５拡張区、遺構検出作業。

12月１日(水)　Ｔ－５遺構検出作業後、柱穴掘り

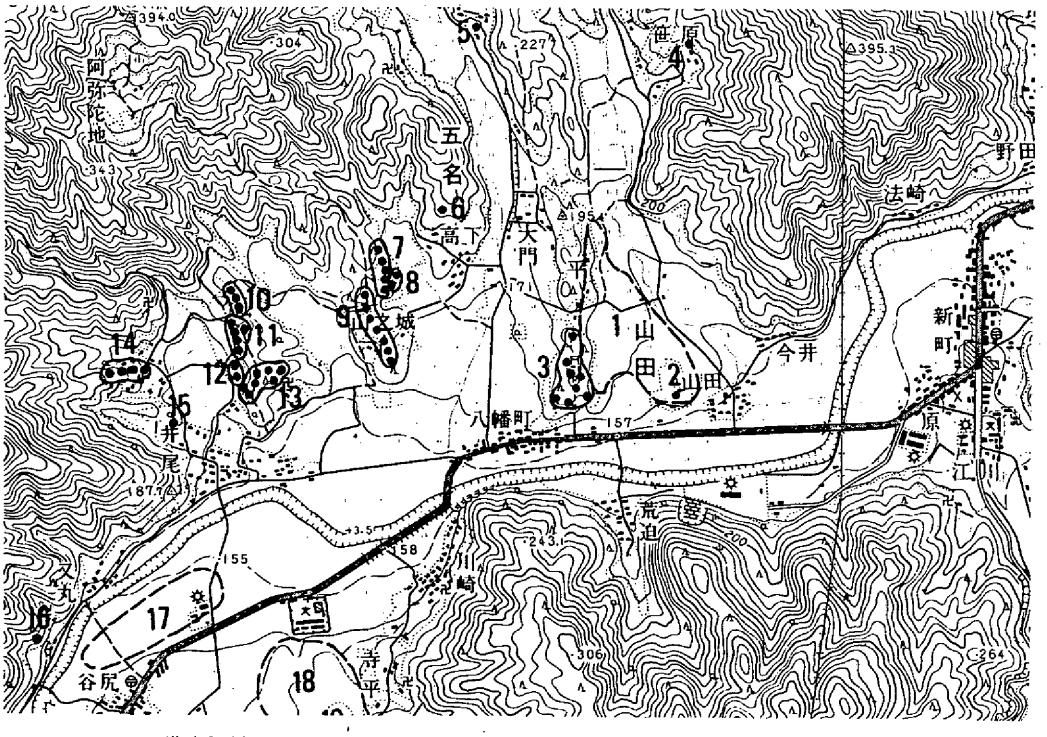
下げ。
2日(木)　T－5拡張区柱穴掘り下げ。清掃後写真撮影。
3日(金)　T－6′掘り下げ。T－1埋め戻し。T－5平板実測。
6日(月)　T－3、4、9埋め戻し。
7日(火)　T－7～9埋め戻し。T－10掘り下げ。
8日(水)　T－10、11断面図作成後、埋め戻し。T－12掘り下げ清掃後写真撮影。
9日(木)　T－12～14写真撮影。T－12、13平・断面図作成。T－14～16掘り下げ。T－11埋め戻し。
10日(金)　T－14～16断面図作成。T－17、18掘り下げ。
11日(土)　T－13～16埋め戻し。
14日(火)　T－17、18掘り下げ。
15日(水)　T－19、20掘り下げ。T－17～20写真撮影及び平・断面図作成。
16日(木)　T－17～20埋め戻し。
17日(金)　T－2拡張区、遺構検出作業。
18日(土)　T－2拡張区、遺構掘り下げ。
20日(月)～22日(水)　T－2拡張区、遺構掘り下げ。
23日(木)　T－2拡張区、清掃後写真撮影。
24日(金)　T－6′埋め戻し。2区拡張区平板実測。
25日(土)　2区拡張区、平板実測。

昭和58年
1月20日(木)　T－21、22、23掘り下げ。
21日(金)　T－21、23写真撮影。T－22、24、25掘り下げ。
22日(土)　T－22、24～26掘り下げ。T－22、24写真撮影。
25日(火)　T－24～28掘り下げ。T－24～26写真撮影。
26日(水)　T－27、28掘り下げ。
27日(木)　T－27、28掘り下げ後写真撮影。T－21～24平・断面図作成。T－21埋め戻し。
28日(金)　T－25～28平・断面図作成。T－22、24、28埋め戻し。
29日(土)　T－23、25～27埋め戻し。
2月1日(火)　T－29、30掘り下げ。
3日(木)　T－29、30掘り下げ後遺構検出作業。
4日(金)　T－29清掃後写真撮影。T－30、31掘り下げ。
5日(土)　T－30、31掘り下げ後写真撮影。T－29～31平・断面図作成。
7日(月)　T－29～31埋め戻し。
8日(火)　発掘調査終了。発掘機材を岡山へ運搬。

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の位置

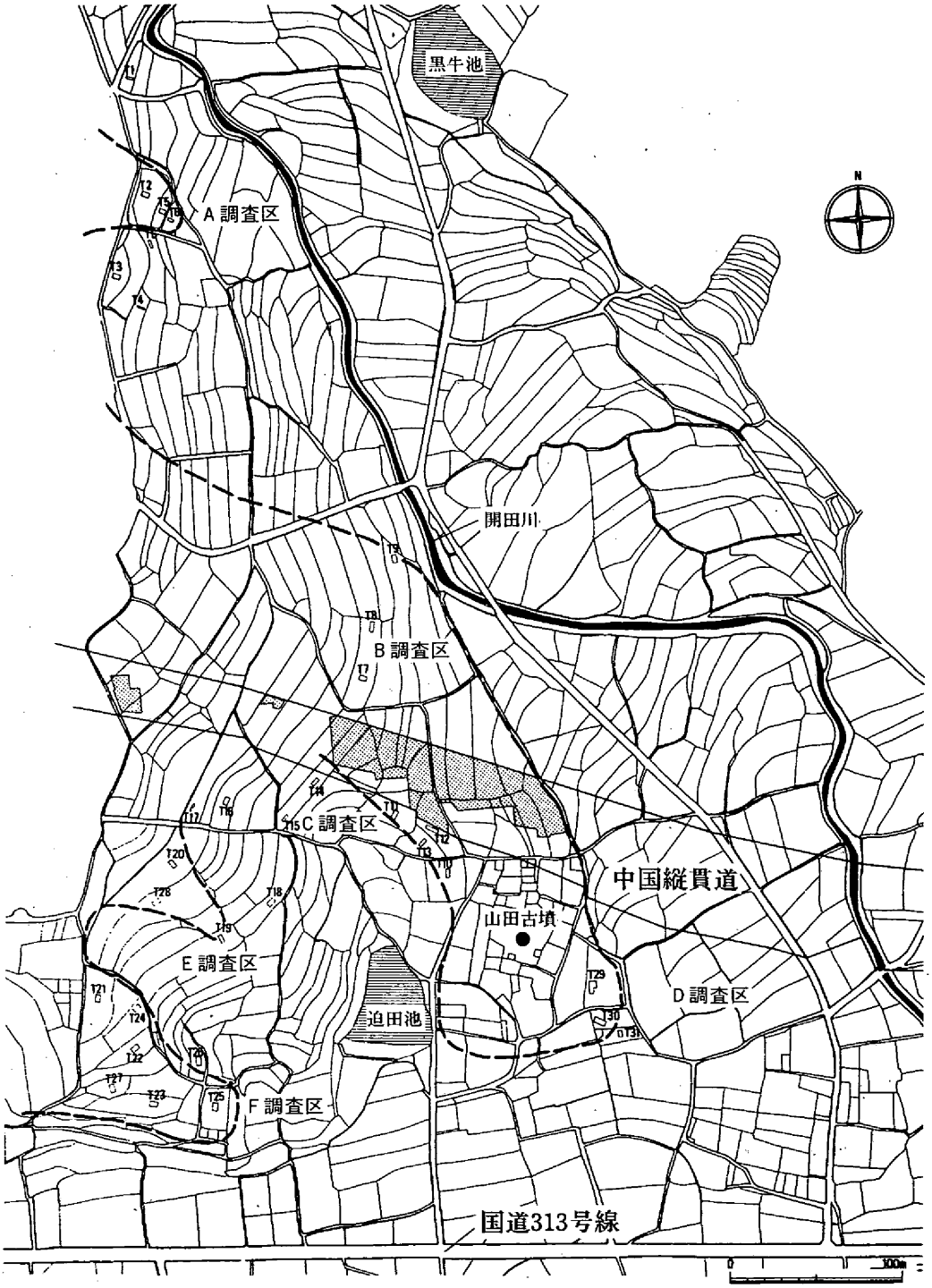
備中平遺跡は上房郡北房町五名に所在する。北房町上呰部を水源とする備中川は上水田で中津井川と合流し、流路を東北に向け東に接する落合町で旭川に注いでいる。この備中川により開かれた上水田一帯の平野は、山田付近において、南から張り出した急峻な丘陵と、北から延びる低丘陵によって狭くなっているが、この低丘陵南端には現在、八幡神社が所在している。この神社の周囲には８基の古墳からなる八幡山古墳群が点在している。この低丘陵の東には低位台地が南東に延びており、東側には小河川の開田川が備中川に注ぎ込んでいる。備中平遺跡はこの低位台地上に広がっており、南端部には山田古墳が所在している。現在、この一帯は大



１．備中平遺跡　２．山田古墳　３．八幡山古墳群
４．笹原古墳　５．興法池１号墳　６．大塚古墳
７．広高下古墳群　８．高下古墳群　９．山之城古墳群
10．長そね古墳群　11．赤羽根古墳群　12．東観現寺古墳群
13．観現寺山古墳群　14．塚の峠古墳群　15．国重古墳
16．又丸古墳　17．谷尻遺跡谷尻地区　18．谷尻遺跡赤茂地区
19．英賀廃寺

第３図　備中平遺跡の周辺遺跡図

部分が水田であり、一部、畑地・民家及び墓地となっており、ここを南北に分断するように中国縦貫道が走っている。



第4図　トレンチ位置図

第２節　調査の方法と概要

発掘調査は中国縦貫道建設に伴う発掘調査結果をもとに、圃場整備計画地内の低位台地上を対象として行なった。低丘陵から南東に延びる低位台地は谷を挟んで４つに派生しているが、この台地南端の一部及び縦貫道の北西部は圃場整備計画から除外されているため、トレンチ設定に際してはその間隔にかなり隔った所もある。なお、トレンチは３ｍ×５ｍの15㎡を基本とし、各地点の中央部及び斜面にかかる部分に32ヵ所設定した。なお調査の都合上、北からＡ～Ｆ地点として調査を実施した。以下、各調査区各に概略を記す。

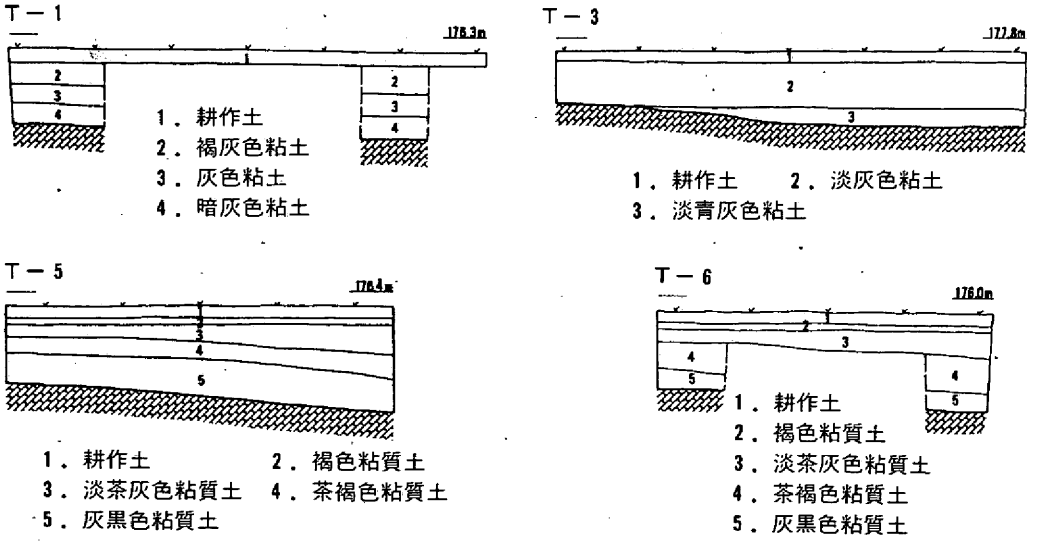
Ａ調査区

当調査区は想定される遺跡の北端に位置し、トレンチを７箇所設定することによって、Ｔ－１、３、４は谷地形を示し、Ｔ－２、５、６に台地が延びていることが判明した。

Ｔ－１は耕作土下に三層の粘土層が堆積しており、地表下70cmで地山に達したが、遺構・遺物は皆無であった。

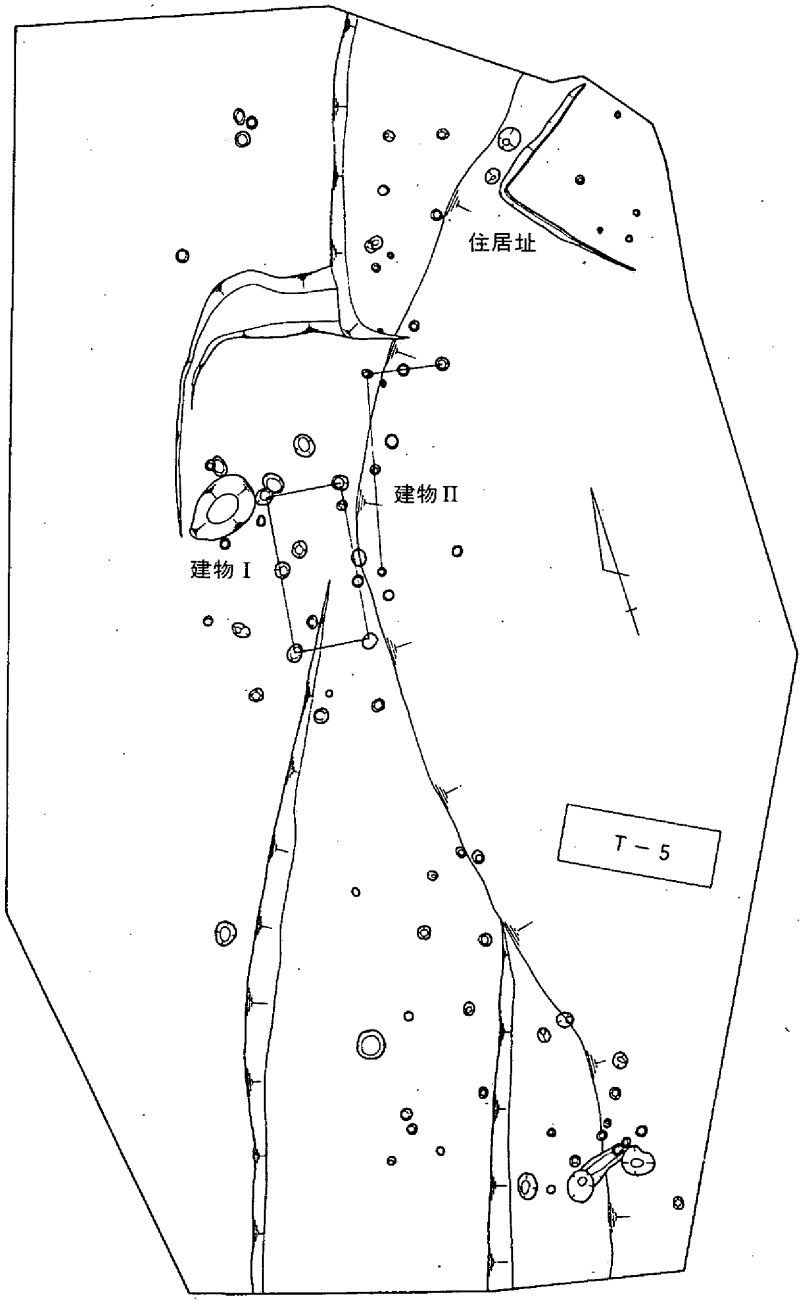
Ｔ－３、４は耕作土下に淡黄色あるいは淡灰色の客土が堆積しており、地表下30～60cmで黄褐色粘質土に達したが遺構は検出されなかった。なおＴ－３耕作土から須恵器及び土師器の細片が出土した。

Ｔ－２は耕作土下に旧水田層が堆積しており同層から須恵器及び土師器片が出土した。さらに掘り下げた結果地表下40cm～60cmで黄褐色砂礫の地山に達し、この面からは柱穴３個が検出された。このため調査区を拡張するとともに、遺構の拡がりを確認するためＴ－５、６、６′を設定した。この結果、Ｔ－５、６の地山は東方向へ傾斜しており、この斜面堆積層（第３、４



第５図　Ａ調査区土層断面図（１／80）

層）から須恵器及び土師器片が出土した。なお第５層は黒ボク層で遺物は皆無であった。また、6′においては耕作土下80cmまで砂礫層が客土として利用されており、地山は南に下っていることが想定された。一方、２区拡張区からは古墳時代住居址１軒、古代～中世にかけての建物２



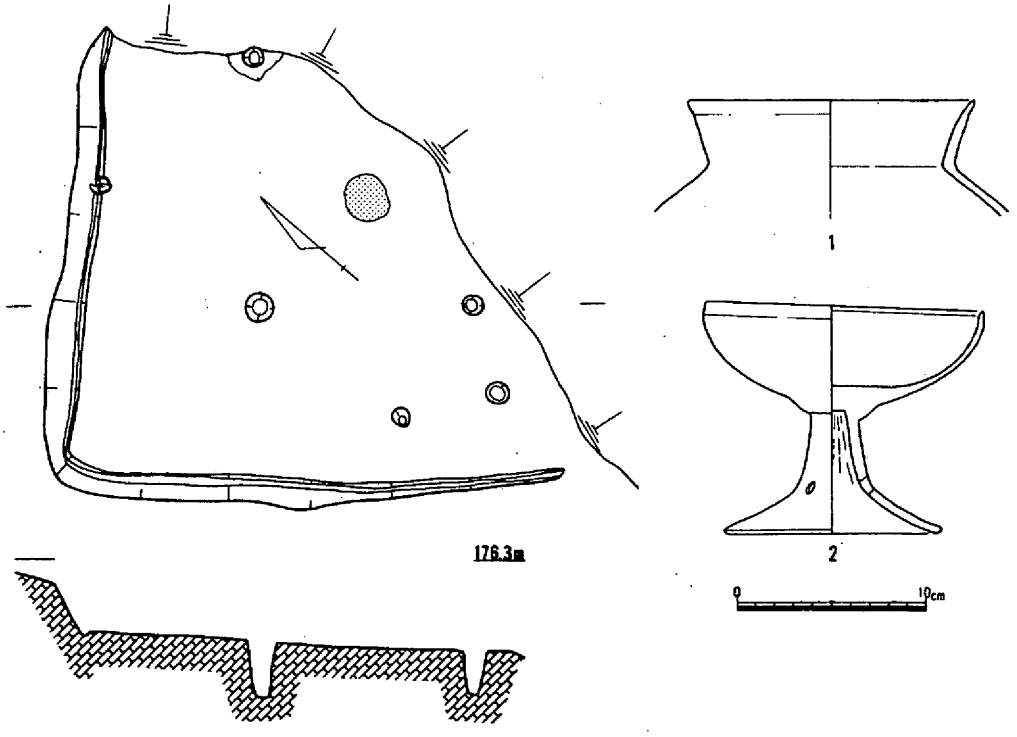
第６図　Ｔ－２拡張区全体図（１／200）

棟が検出された。

住居址　調査区北東端に位置し、この東の水田との高低差は２ｍ近くあり、旧地形は比較的急な斜面になっていたと思われる箇所である。検出された住居址は約半分が既に流れてしまっている。平面プランは方形を呈し、現存する一辺は５ｍ、深さ45cmを測るが、柱穴の位置から想定すれば一辺６ｍ前後の規模を持つものであろう。柱穴は３個残存しており、直径約25cm、深さ約60cmを測る。住居址中央付近には径40×20cmの範囲に焼土面が確認された。

遺物は甕形土器及び高杯形土器の２点が出土したが、前者は暗茶褐色粘質土の覆土内から、後者は北壁際の床面に杯部を伏せた状態で出土した。

甕形土器（１）は口縁部は斜め上方に延び、端部はやや薄く、丸くおさめている。体部は大部分欠損しているが丸底を持つものであろう。器表面の剥離が激しく、調整方法は明らかではないが、体部内面は篦削りしているようである。黄褐色を呈し、1.5mm前後の砂粒を含む。高杯形土器（２）は椀状を呈す杯部をもつもので、口縁端部はやや内傾し、面をもつ。脚部は「ハ」の字状に緩やかに広がり、脚部中央には円孔が３個穿たれている。脚部内面に絞り目が確認されるものの、調整方法は前述と同様不明である。黄褐色を呈し、0.5mm前後の砂粒を含む精製粘土である。



第７図　住居址平・断面図（１／60）及び出土遺物（１／４）

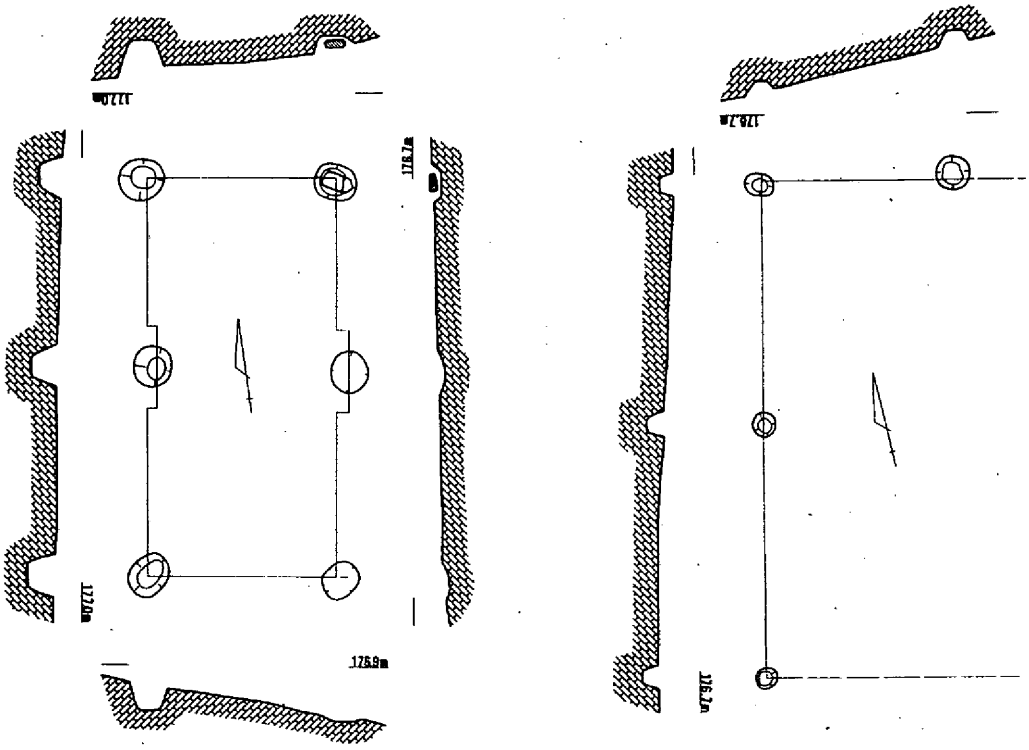
以上、当住居址は、出土遺物の特徴から５世紀～６世紀にかけてのものと考えられる。

建物Ⅰ　調査区のほぼ中央から検出されたもので、地山は南東に傾斜しており、この部分の柱穴２個は、僅かに柱穴の形状を残す状況で検出された。梁間１間、桁行２間の建物で、建物の長軸方向は南北方向を向き、柱の掘り方は円形を呈す。直径約40cm、深さは残りの良い北西隅で25cmを測る。北東の柱穴には板石が置かれていた。建物の規模は梁間2.0ｍ、桁行は北から2.0ｍ及び2.2ｍを測り、この桁行中央の柱穴はいずれもやや東に寄っている。遺物は皆無であった。

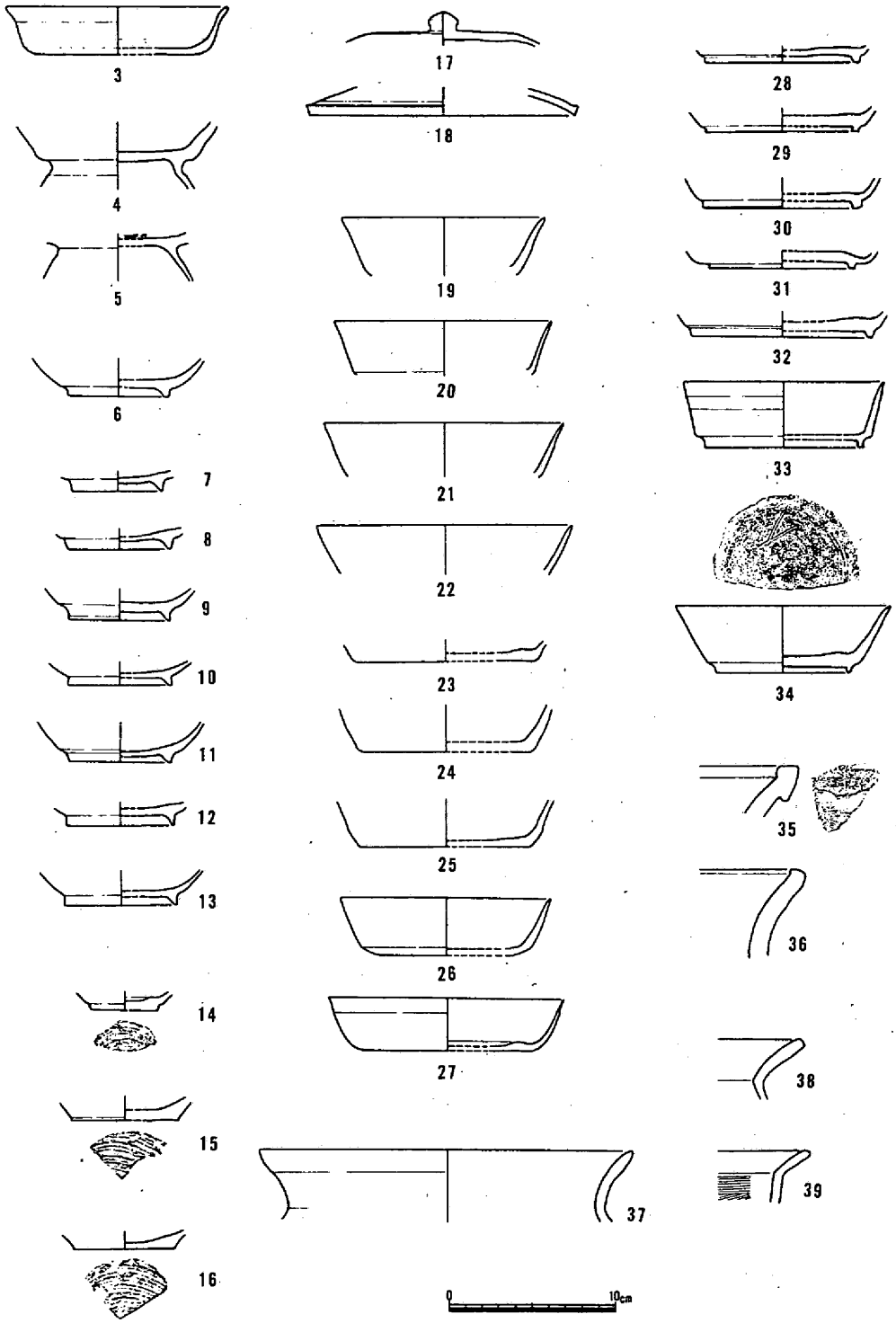
建物Ⅱ　建物Ⅰの北東に一部重複するような位置から検出された。南東部の柱穴は検出されなかったものの、梁間１間、桁行２間の建物が想定される。建物の長軸方向は南北方向を向き、柱の掘り方は円形を呈し、直径約25cm、深さ約20cmを測る。建物の規模は梁間2.0ｍ、桁行は4.0ｍを測る。遺物は皆無であった。

遺物

当調査区では、前述の住居址以外に耕作土、旧水田層、斜面堆積層から遺物が出土しているが、他のトレンチからも僅かながら認められるため、ここではＡ調査区全体から出土した遺物



第８図　建物Ⅰ・Ⅱ平・断面図（１／80）



第９図　Ａ調査地区出土遺物（１／４）

を記しておく。3は土師器の杯で、口縁部がやや外反し、端部は丸くおさめているもので、4、5は斜め外方に延びる長い高台をもつもので、6は断面四角の短い高台が付くものである。7～13は黒色土器で、内面のみ黒く、外面は赤褐色を呈す。高台は断面三角形を呈し、その径は5～6.5cmを測る。14～16は底部に糸切り痕跡を残す小皿（14）及び皿（15、16）である。17、18は須恵器の杯蓋で、内は退化した宝珠のつまみが付されており、18の口縁端部はやや肥厚し、端面は凹みを呈す。14～22は須恵器の杯身で、口径12～15cmを測る。23～27は須恵器の杯身で口線部が底部から直線的に斜め外方に延びるもの（23～25）と底部からやや丸みをもつもの（26、27）がある。なお27の口唇部の厚みは1mm程で非常に薄い。28～34は低く細い貼り付け高台が付く須恵器の杯で34の身内面には窯印がみられる。35、36は須恵器の甕で、35の口縁部及び端部には波状文が施されている。37、38は土師器の甕で、39は体部内面に横方向の、外面に縦方向の刷毛目が見られる土鍋である。

以上、A調査区からは、古墳時代住居址1軒、古代～中世にかけての建物2棟が検出され、遺物は古墳時代～中世にかけてのものが出土しているが、奈良時代後半～平安時代にかけてのものが大部分であった。

B調査区

縦貫道の北にあたる一帯である。縦貫道部分は前回の発掘調査によって、縄文時代早期の土器片をはじめ古墳時代～中世の遺構・遺物が明らかにされている。当調査区は前回調査された地形を追うことにより遺跡の北の広がりを確認した。

T－7、8　同一水田に東西方向と南北方向にトレンチを設定した。いずれも耕作土下には淡黄灰色の粘質土が堆積していたが、その下層は前者が地山に達するのに対して、後者は地山との間に暗茶褐色粘質土が堆積している。このことから旧地形は本来南に高く、北にやや傾斜していたものと考えられる。いずれのトレンチからも柱穴が検出されており、径は20～60cm前後のものであり、柱穴内埋土は淡黄灰色粘質土及び暗茶褐色粘質土の2種類が認められた。遺物は、第2層から須恵器片及び土師器片が出土している。

T－9　T－8の北に位置し水田面は、T－8の水田面より1.3m程低く、当トレンチ北側の水田はここよりさらに1m低い位置にある。調査の結果地山は当トレンチで北東方向に傾斜することが確認され、斜面堆積層からは須恵器片及び土師器片が出土した。

C調査区

縦貫道の南、東西方向に走る小農道の北にあたる部分である。当調査区には8ヵ所トレンチを設定した結果、調査区西方は大きく谷が入り込んでおり、南の迫田池に向って地形が下っていることを確認するとともに、調査区東方には遺跡の広がっていることが判明した。

T－12、トレンチを縦貫道の側道に添って入れた結果、耕作土下10cm足らずで地山面に達し、柱穴数個が検出された。柱穴は径20～40cmを測り、柱穴内埋土は暗茶灰色粘質土及び黒灰色粘質

土の２種類が認められたが、中でもトレンチ西方から検出された重複する柱穴は、前回調査で発掘された建物12の南西隅にあたるものである。これによれば梁間１軒桁行２間の建物で、建物の長軸方向は東西方向を向き、規模は梁間2.0ｍ、桁行は東から1.8ｍ及び2.0ｍを測るものである。

Ｔ－13　Ｔ－12の南に位置するもので、上記の遺構面を追った結果、耕作土下15cmで地山に達し、この面からも柱穴数個を検出した。さらにトレンチ南方では旧地形が南西に若干傾斜することが確認された。

Ｔ－10、11　両トレンチはＴ－12、13の遺構検出のあり方や地形から遺構の広がる可能性が強いものの、削平を受けているためか耕作土下の地山面からは遺構は全く確認出来なかった。なお、Ｔ－11の水田東端からは前回調査によって検出された南北溝数条が続くものと思われる。

Ｔ－14～17　いずれも耕土下40cm前後で自然堆積層に達したが、堆積土は粘質が強く掘り下げに困難を来した箇所である。調査の結果、遺構は確認されなかったものの、Ｔ－16からは須恵器片が出土している。

Ｄ調査区

遺跡の東南の位置にあたる。Ｂ、Ｃ調査区と同様の低位台地上の部分であり、調査区の西方には横穴式石室を持つ山田古墳が所在する。

Ｔ－29　現在は畑地となっているが、以前は水田耕作されていた箇所で、トレンチ北方には暗渠排水と思われる溝３本が東西方向に延びている。一方、耕作土下からはトレンチ全体にわたって柱穴が検出された。柱穴は直径20～50cmのもので、柱穴内埋土は灰褐色粘質土及び黒灰色粘質土の２種が認められた。また、直径約50cmを測る大形の柱穴群からは梁間１間、桁行１間以上の建物１棟が確認された。この建物の１柱穴からは備前焼擂鉢の破片が出土している。

Ｔ－30　Ｔ－29の南に位置する畑地で、南に緩く傾斜している。このトレンチにおいても残りは悪いものの、径約20cm、深さ約10cmを測る柱穴数個を検出している。また、トレンチ西端からは径約３ｍ、深さ140cmを測る風倒木痕が検出されたが、この上面部分から埴輪２個体分が散在した状態出土した。遺物は耕作土中から須恵器及び土師器の破片が出土している。

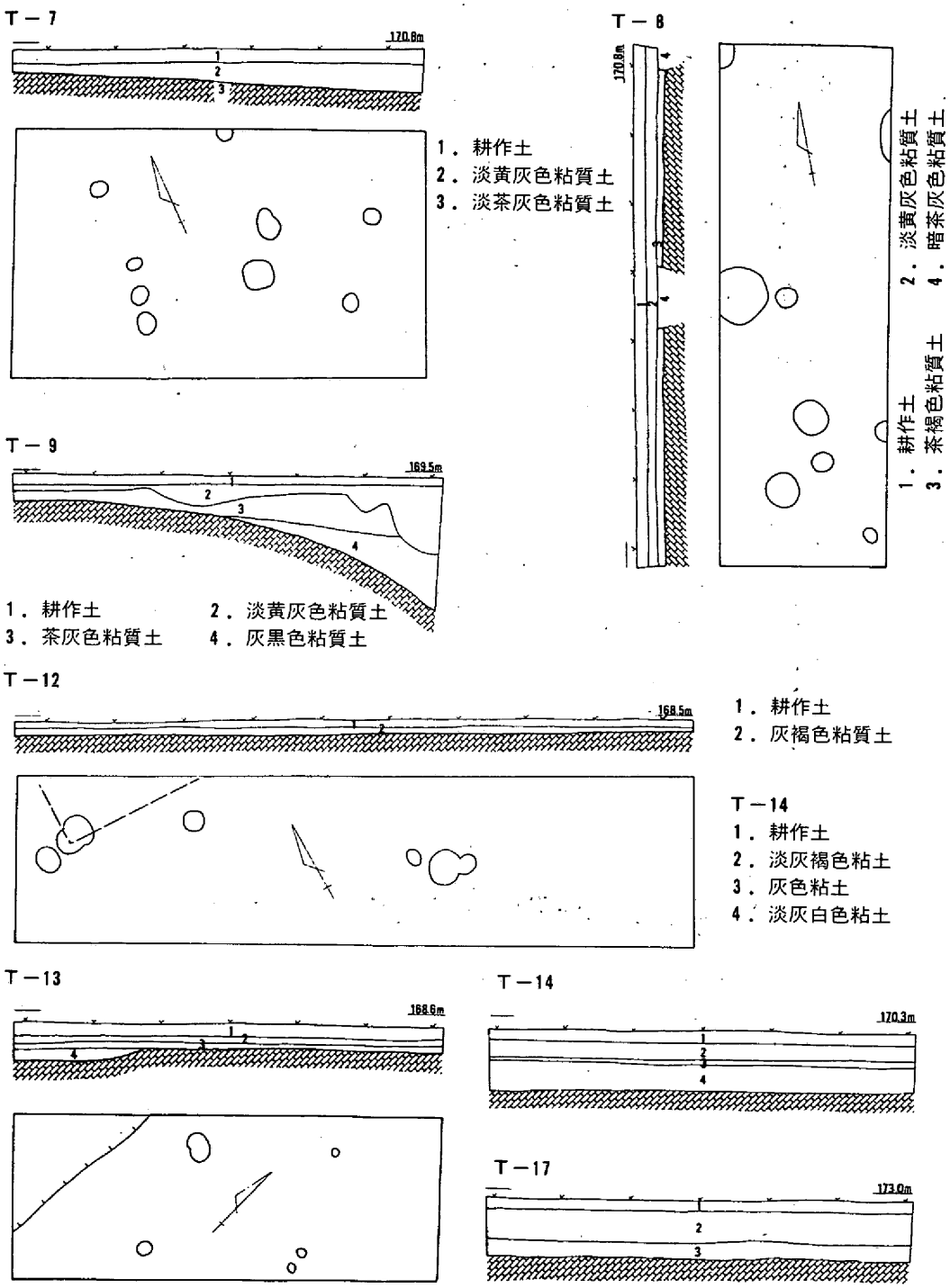
Ｔ－31はＴ30の東にあたり、地表面は約１ｍ程下った所であるが、遺物は耕作土から土師器及び須恵器の破片が出土したものの、遺構は検出されなかった。

なお、Ｔ－30の南、Ｔ－31の西方には一辺1.5×１ｍ程の石囲いが認められ、その中には五輪塔数基が散在しており、中世～近世にかけての墳墓と思われる。

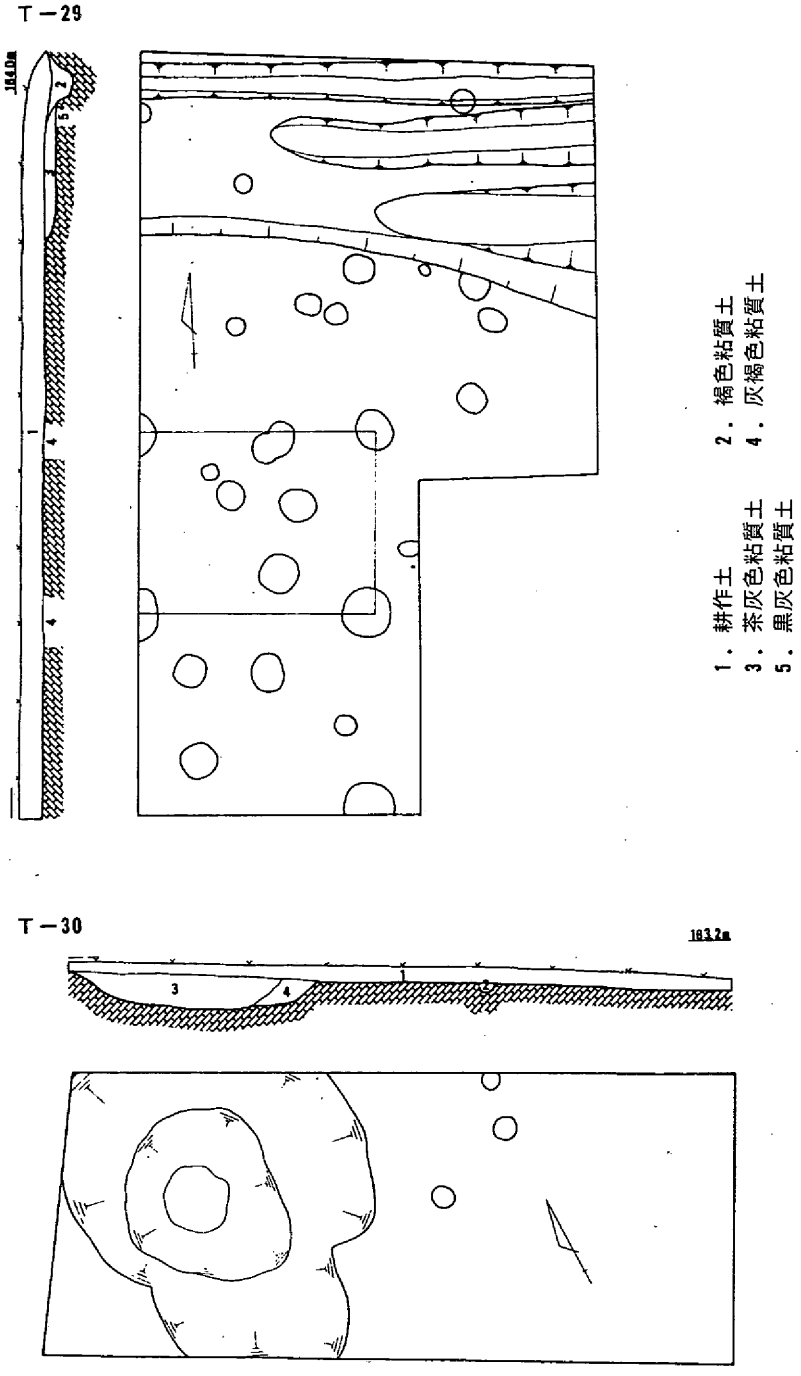
Ｅ調査区

水田の形状から、Ｃ調査区の谷を狭んで南東方向に低位台地の張り出しが想定されたところで、トレンチを４箇所入れた結果、残りは悪いものの、Ｔ－20からは遺構が確認された。

Ｔ－20は、耕作土下約10cmで地山に達したが、地下は東方にやや傾斜しており、トレンチ中央

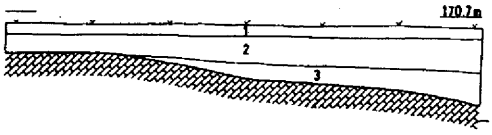


第10図　B・C調査区平・断面図（1／80）



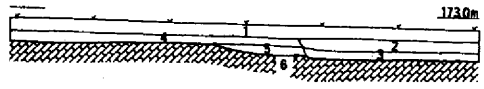
第11図　D調査区平・断面図（1／80）

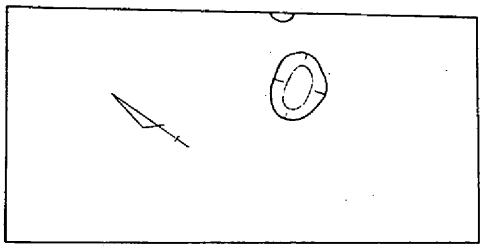
T－19



1．耕作土
2．淡灰色粘土
3．淡灰褐色粘質土

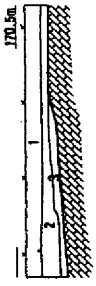
T－20

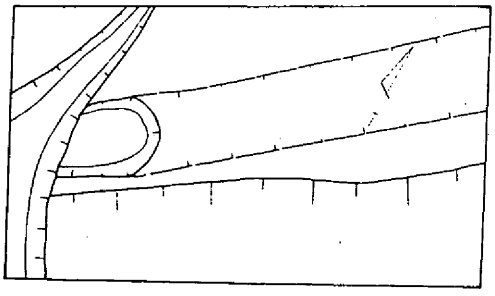




1．耕作土
2．灰褐色粘土
3．灰色粘土
4．淡褐灰色粘土
5．淡茶灰色粘質土
6．茶灰色粘質土

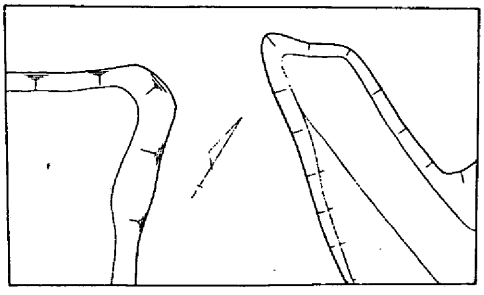
T－22



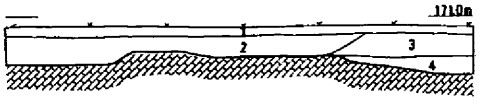


1．耕作土
2．灰色粘土
3．灰茶色粘土

T－24



1．耕作土
2．灰色粘土
3．淡灰褐色粘質土
4．淡灰茶色粘質土



第12図　E・F調査区平・断面図（1／80）

から東部分では一段下った旧水田層が確認された。遺構は径約20cmの柱穴及び径70×55cm、深さ20cmを測る土壙が検出された。いずれも遺物はなく時期は不明であるが、第4層から土師器及び須恵器の破片が出土している。なお、この台地の張り出しはT19まで延びていることが確認された。

F調査区

遺跡の最南端に位置し、7箇所のトレンチを設定した結果、T－22、24、25から遺構が検出された。

T－22　想定される低位台地中央に位置する。トレンチの南約3分の1は旧水田層によって削平を受けているが、溝2条が検出された。南北方向の溝は北端で幅30cm、深さ10cmを測り、南に向ってその幅は広くなっている。一方、この溝に流れ込むように南西方向の溝が検出された。幅80cmを測るが、深さは僅か数cmを残すものであった。遺物は耕作土から土師器片が出土したのみで、溝からは確認されなかった。

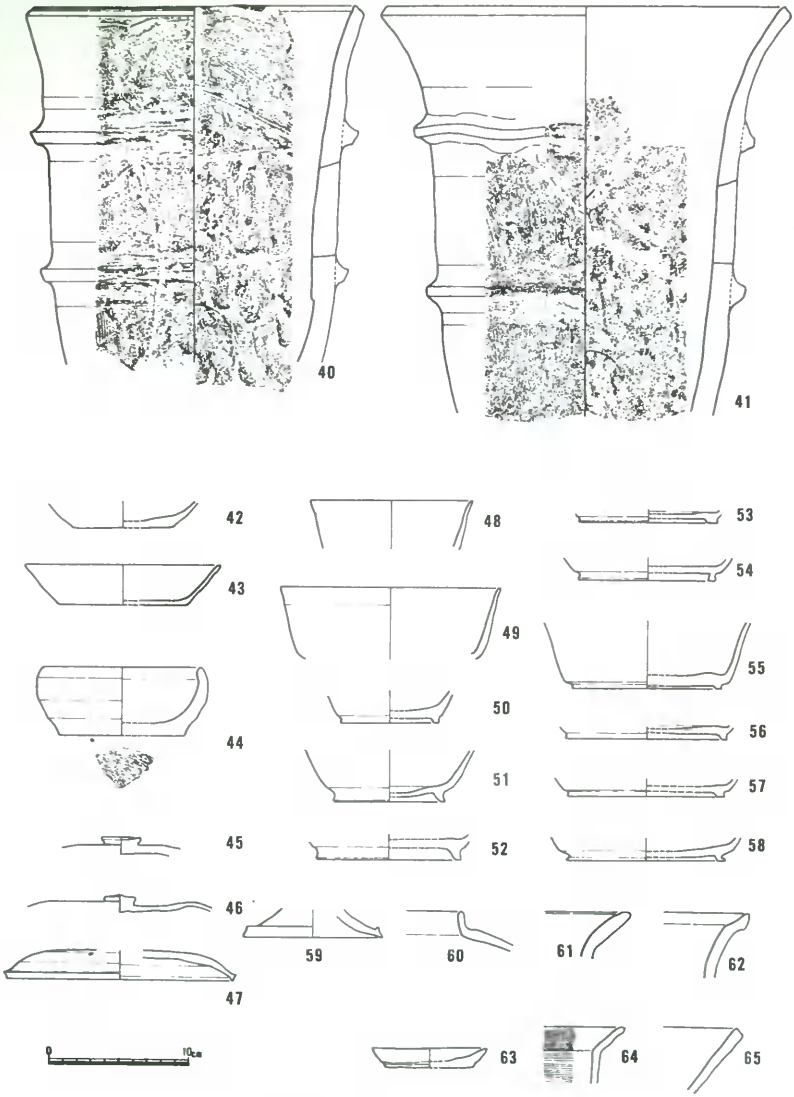
T－24　T－22の北に位置し、耕作土下約15cmから南東方向に延びる溝を検出した。溝の幅は約1m、深さ20cmを残すもので、溝の平面形態から溝はトレンチの東側で2条に別れる可能性がある。遺物は耕作土～3層にかけて土師器、須恵器、備前焼の破片が出土しているが、溝からは皆無であった。

他にT－25からは径15cm前後の柱穴3個が検出されており、遺跡は台地が張り出すこのトレンチ一帯まで延びてきているものと考えられるが、上記のとおり当調査区の遺構の残存状態は非常に悪い地点であった。

遺物

B～F調査区はB区T－9の斜面堆積層を除き全体に出土遺物は少なかったため、ここに一括して説明を加える。

40、41はいずれも埴輪片である。全体の½近くが残存するものである。口縁部が斜め外方に延びる40と緩く外反する41は、全体に雑な作りで、41の上段タガは水平に貼付されていない。外面は縦方向の刷毛調整、内面は上部⅓程は刷毛調整しており、以下は押圧による調整のみで終っている。中段及び下段には交差するように各々円孔が2箇所に穿たれている。黄褐色を呈し、微砂粘質のものである。42、43は土師器の杯で、42は口縁部推定径14cm、高さ3cmを測るもので、内外面を丹塗にしている。44は須恵器杯で、底部に糸切り痕跡が認められる。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめており、全体に器壁は厚い。46～47は須恵器の杯蓋で、45は偏平で中央部がやや凹むつまみが、46は退化した宝珠つまみが付されている。48～58は須恵器の高台が付く杯で、高台の比較的高い51、52と低く細い53～58がある。59は須恵器の高杯で脚端部は肥厚し、僅かに凹む面をもつ。60は須恵器の短頸壺で、61、62は甕の破片である。63は土師質の小皿で底部は箆起している。64は土師質の土鍋で、体部外面に縦方向の、内面に横方向の荒い刷毛目が認められる。65は備前焼のこね鉢である。



第13図　B～F出土遺物（1／4）

第4章　まとめ

備中平遺跡は前回の発掘調査によって遺跡の時期及び、遺構の東西の広がりが判明し、今回の確認調査によって主に遺跡全体の規模を確認することが出来、その規模はおよそ60,000㎡におよぶことが明らかとなった。ここでは前回調査の結果を加えまとめとしたい。

備中平遺跡は南に延びる低丘陵から東に広がる低位台地上に位置する。この低位台地は3つの谷によって大きく4つに分かれており、いずれの台地においても、粗密の差はあるものの遺構・遺物が確認された。特にB～D調査区を含む台地は規模も大きく、当遺跡の中心的な位置にあたるが、縦貫道は結果的にこの中央部分を東西に貫通していることが判明した。以下、時代順に説明を加える

当遺跡の時代の最も古く遡れるものとしては前回調査で出土した縄文時代早期の押型文土器片及び石鏃があげられる。しかしながら遺構は検出されておらず、今回調査においても遺構・遺物は皆無であった。さらに前回調査では、弥生時代の石器と考えられるものも数点出土しているが、土器類は1片も出土していない。このことから弥生時代の集落址が存在した可能性は薄く、継続的にこの台地を利用され始めるのは古墳時代以降と考えられる。

古墳時代に入ると、A調査区及び、前回調査から5世紀～6世紀にかけての住居址2軒、土壙1が検出されているが、住居址のあり方や、この時期の遺物は他地点から全く出土していないことから、遺構の密度は薄く、台地上には数軒の住居址が散在していたものと考えられる。その後、台地南東端には横穴式石室を持つ山田古墳が築営されているが、この古墳の東にあたるD調査区からは埴輪が出土した。この埴輪は当古墳に囲繞されていたことも考えられるが、古墳との距離は50m近く離れているため、この一帯は山田古墳のみではなく、何らかの埋葬に関連する遺構が存在する可能性もある。

奈良時代に入ると遺跡の状況は一変する。これまで点々と散在していた遺構が、この時期になるといずれの低位台地からも検出されており、出土遺物においても「吉祥」の墨書土器をはじめ、その大半が8世紀を中心とするものであった。特にA調査区からは建物2棟が、前回調査からは建物18棟が検出されており、これらの建物はその遺構の残存形態から、時期決定は困難であるが、包含層中の土器のあり方から大半はこの時期に含まれるものとして大過ないであろう。以後、中世の遺構はD区から建物1棟、前回調査から溝、土壙墓等を確認しているが、前代と比べ遺構の数はふたたび少なくなるようである。古代～中世のこの様な遺跡のあり方は、当遺跡から南西へ約1.5kmに所在する白凰時代創建の英賀廃寺や、中世建物群の検出された谷尻遺跡等との関連において、今後明らかにされていくものと考える。

図版 1

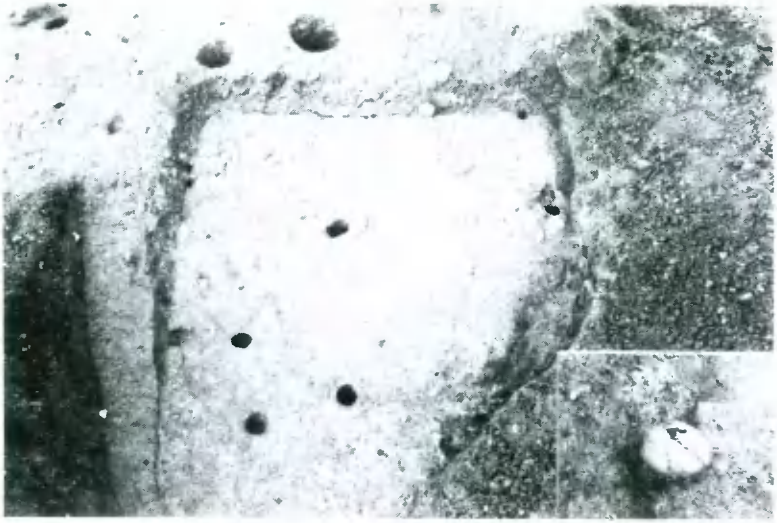
1－1　A・B調査区遠景（北東から）

1－3　E・F調査区近景（東から）

1－2　D調査区近景（東から）

図版 2

2－1　　T－2　拡張区遺構検出状況（西から）



2－2　　T－2　拡張区住居址検出状況（東から）及び遺物出土状況（南から）

図版 3

3－1　　T－2　拡張区建物Ⅰ検出状況（西から）

3－2　　T－2　拡張区建物Ⅱ検出状況（西から）

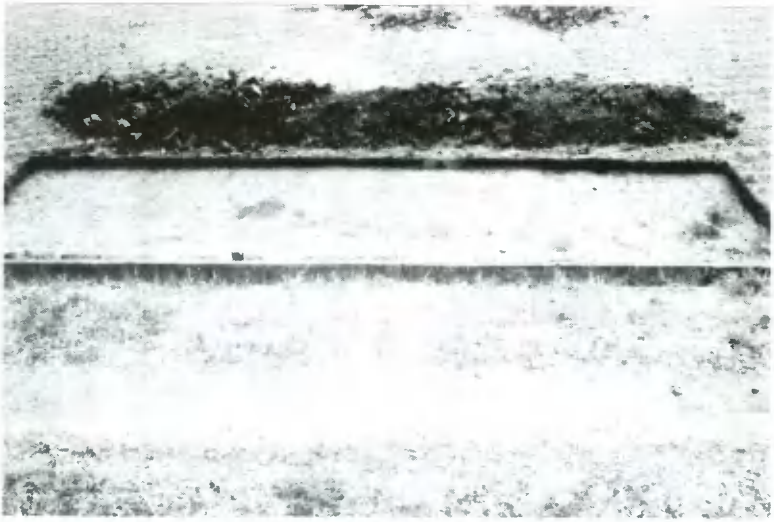
図版 4

4 － 1　　T － 7　遺構検出状況（南から）

4 － 2　　T － 8　遺構検出状況（東から）

図版 5

5－1　　T－9　斜面堆積状況（南東から）



5－2　　T－12　遺構検出状況（北から）

図版 6

6 － 1　　T －29　遺構検出状況（北から）

6 － 2　　T －30　遺構検出状況（西から）

図版 7

7－1　　D調査区　五輪塔集積地（東から）

7－2　　D調査区西　山田古墳（南東から）

図版 8

出　土　遺　物

原　遺　跡

例　　言

1．本書は岡山県教育委員会が昭和57年度国庫補助を受けて実施した「原遺跡、徳倉城址関連遺跡」の発掘調査概要報告書である。

2．遺跡は御津郡御津町大字宇垣、河内に所在する。

3．発掘調査は文化課職員松本和男が担当し、専門委員の指導、助言を得て昭和57年11月８日から昭和58年２月28日まで実施した。

4．発掘調査は御津町役場、御津町教育委員会、御津町文化財保護委員、地権者等関係各位より絶大なる援助を受けた。特に発掘作業に従事していただいた河内地区有志の方々には大変にお世話になりました。記して謝意を表わします。

5．遺物の整理は文化課分室で松本が行った。なお、遺物、実測図、写真等は文化課分室（岡山市西古松）において保管している。

6．本報告書の執筆、編集は松本が行った。調査及び報告書作成にあたっては、文化課職員・二宮治夫、調査補助員・岩崎仁司、分室・亀田菜穂子の協力を得た。

7．本書に使用したレベル高は海抜高である。方位は第１～３、13、19図が真北、他は磁北である。トレンチ平・断面図は60分の１である。

8．本書第１図に使用した地形図は建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（岡山北部）を複製したものである。

目　　次

例　言
第１章　地理的・歴史的環境 …… 73
第２章　調査の経緯 …… 76
　第１節　遺跡の位置と現状 …… 76
　第２節　調査に至る経過 …… 76
　第３節　調査の方法と経過 …… 77
第３章　調査の概要 …… 80
　第１節　原遺跡 …… 80
　第２節　徳倉城址関連遺跡 …… 93
　第３節　遺物 …… 94
第４章　まとめ …… 99

図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 73
第２図　周辺遺跡地図（S＝$\frac{1}{50000}$） …… 74
第３図　原遺跡トレンチ設定図（S＝$\frac{1}{7500}$） …… 83
第４図　T－２、４、５平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$） …… 84
第５図　T－６、７平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$） …… 85
第６図　T－８、12 平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$） …… 86
第７図　T－22、10、26 平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$） …… 87
第８図　T－13、14 平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$） …… 88
第９図　T－17、16、20 平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$） …… 89
第10図　T－18 平・断面図及び住居址内出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{60}$、$\frac{1}{4}$） …… 90
第11図　T－29 平・断面図及び４号住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{60}$、$\frac{1}{1}$） …… 91
第12図　T－29 内出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{4}$） …… 92
第13図　徳倉城址関連遺跡トレンチ設定図（S＝$\frac{1}{10000}$） …… 93
第14図　徳倉城址関連遺跡T－１土層断面図（S＝$\frac{1}{60}$） …… 93
第15図　原遺跡出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{2}$） …… 95

第16図　原遺跡出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{4}$）……96
第17図　原遺跡出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{4}$）……97
第18図　原遺跡出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{4}$）……98
第19図　原地区における遺跡群（S＝$\frac{1}{12500}$）……101

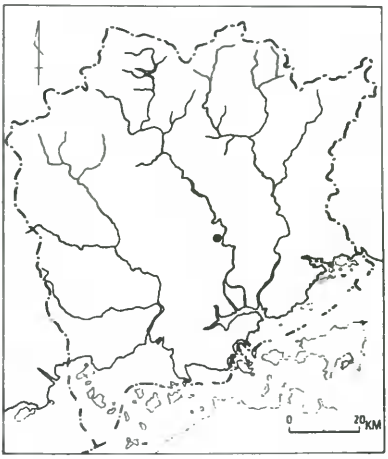
図版目次

図版1　(1)　原遺跡遠景（北東から）
　　(2)　原遺跡近景（北東から）
図版2　(1)　原遺跡近景（南から）
　　(2)　原遺跡近景（南西から）
図版3　(1)　原遺跡近景（南西から）
　　(2)　原遺跡瓦粘土採掘跡遠景（南西から）
　　(3)　徳倉城址本丸石垣（東から）
図版4　(1)　徳倉城址関連遺跡遠景（北から）
　　(2)　徳倉城址関連遺跡近景（北から）
図版5　(1)　原遺跡瓦粘土採掘跡近景（北東から）
　　(2)　原遺跡発掘調査風景（東から）
図版6　(1)　T－4遺構全景（南から）
　　(2)　T－5遺構全景（南から）
　　(3)　T－6遺物出土状態（東から）
図版7　(1)　T－7遺構全景（東から）
　　(2)　T－12遺構全景（東から）
　　(3)　T－12土層断面（南東から）
図版8　(1)　T－8最下層遺構全景（北から）
　　(2)　T－22最下層遺構全景（北から）
　　(3)　T－26全景（南西から）
図版9　(1)　T－13遺構土層断面（南から）
　　(2)　T－14住居址全景（南から）
　　(3)　T－20土層断面（南東から）
図版10　(1)　T－16土層断面（東から）
　　(2)　T－17遺構全景（東から）
　　(3)　T－18遺構全景（東から）
　　(4)　T－18住居址近景（東から）
図版11　　出土遺物
図版12　　出土遺物

第１章　地理的・歴史的環境

原遺跡の所在する御津郡御津町は岡山県の中央部を南流する旭川のほぼ中流域に位置し、東は赤坂、山陽町、南は岡山市、西は加茂川町、北は建部町に接し、面積約114㎢を有する。

御津町の主要な集落は北から南に流れる旭川と、北西から南東に流れて金川で旭川と合流する宇甘川、北東から南西に流れて金川で旭川に合流する新庄川によって形成されたいくつかの平野に立地している。



第１図　遺跡位置図

原遺跡はこの旭川右岸に形成された広大な沖積平野に所在する。この沖積平野には富谷から天神、鳴部落沿いに蛇行して、現在の宇垣コミュニティセンターの西側で三谷川に合流する旧河道の存在が考えられているが、恐らく鳴部落沿いから玉松園の東側にも旧河道が同時期に存在していたことと思われる。このことは地形が周辺と著るしく異なることからみても推察できる。その後、富谷付近は原部落の微高地と接続したため、富谷、天神、鳴部落沿いは後背湿地となったことがトレンチ調査によって確認されている。さらに、原の微高地を分断する河道が再びつくられた痕跡がみとめられた。現在の旭川とこれに平行する国道付近は中州であるが、西側部分は明らかに微高地の状態を呈しているのである。遺跡はこのような微高地全体に認められるのである。

御津町内において現在知られている最も古い遺物は伊田岩井山丘陵出土の縄文時代後期の土器である。晩期では鹿瀬遺跡、野々口遺跡、原遺跡であるが、いずれも旭川流域の沖積地に弥生時代の集落址と複合して認められる。鎌木義昌氏が取り扱った原遺跡出土の土器は第１類として凸帯文及沈線文土器、第２類は瓜形文土器、第３類は精製土器、第４類は粗製土器の４種類に分類され、これらの土器群は晩期中葉の「原下層式土器」と呼ばれている。さらに、これらの土器に伴う打製石斧と剥片石器は農耕具と考えられているのである。鹿瀬遺跡は八幡神社境内及び畑地で散布している。野々口遺跡は瓦粘土採掘中に晩期の土器とともに椎の実、ドングリが発見されている。

このように御津町内では縄文時代晩期になると小規模な集落をいくつか沖積平野に形成させ

1．原遺跡
2．徳倉城
3．宇根山古墳群
4．野々口遺跡
5．香雲寺古墳群
6．国ヶ原神社西古墳
7．金川古墳
8．みそのお古墳群
9．管古墳群
10．中泉古墳群
11．実盛山古墳
12．玉松城
13．いかとり古墳
14．平野古墳
15．熊谷城
16．岩井山古墳群
17．酒屋谷遺跡

第2図　周辺遺跡地図（S＝$\frac{1}{50000}$）

ていたことを認めることができるのである。弥生時代になると前期の遺物が原遺跡で発見されているが、他の地域ではまだ認められない。中期後半から後期になると原、野々口、鹿瀬、伊田大谷、岩井山、宅美池、塚の谷、新庄尾上などで確認されているが、いずれも微高地及び各水系を見下す丘陵、山裾に大規模ではないが全町的に認められるのである。

古墳時代に入ると、各水系の丘陵上には数多くの古墳が存在している。分布の在り方は、新庄川水系に八つ塚古墳と天神鼻第1号墳の前方後円墳2基を含めて約50基、宇甘川水系には前方後円墳の管第2号墳を含めて約20基、旭川水系では小型円墳が約20基程確認されている。中でも新庄川水系は年代的、数量的にも他の御津町内における水系と比較して卓越している地域である。

歴史時代に入ると、奈良～室町時代の遺物を出土する原遺跡、岩井山遺跡があるが、特に中世における御津町は山間の交通要衝地にあたることもあって、金川城、徳倉城、虎倉城など多くの城が構築されていたのである。とりわけ、この地域の国人である金川城主の松田氏は文明五年以降には備前国西半を支配する戦国大名として永く君臨していたところであった。

このように、御津町一帯には縄文時代～晩期に至る遺跡が間断なく認められるが、とりわけ、縄文時代晩期及び中世の遺跡が注目されてきた地域であった。

参考文献

(1) 鎌木義昌、江坂　進『岡山県御津町原遺跡―縄文晩期の土器を中心として―』　瀬戸内考古学　第2号　1958年

(2) 神原英朗他『岩井山古墳群』　岡山県御津町教育委員会　1976年

(3) 平井　勝『金川古墳』　岡山県御津町教育委員会　1982年

(4) 出宮徳尚『徳倉城』　日本城郭大系　第13巻所収(広島・岡山) 新人物往来社　1980年

第２章　調査の経緯

第１節　遺跡の位置と現状

原遺跡は御津郡御津町大字宇垣に所在する。中国山地に発源し、瀬戸内海に注ぐ旭川の中流域に位置する本遺跡は、旭川及び南西から東流する三谷川によって形成された広大な沖積平野に立地するのである。さらに詳細にみると、宇垣地区は４つの微高地で形成されているが（第19図）、いずれも粘土堆積層が極めて厚いことである。坂辻においては、現地表からマイナス４ｍに達しなければ砂礫層に至らないという事実がある。（註１）このように、原地区一帯は極めて安定した微高地であったことから、良質の粘土が豊富に、しかも安価で、そして交通至便な位置にあったため、古くから瓦粘土採掘地として著名であった。このため、現在では粘土を採掘した地点は周辺の水田と比較すると著るしく低くなったり、微高地が狭くなっているのである。

江坂進氏は永年の踏査の結果、山条から坂辻一帯に遺物包含層があるが、その中でも原八幡宮の北側一帯が当遺跡の中心地であることを想定していたが（註２）、このような先学の研究成果からみても大規模な遺跡の存在が充分に予想された地域である。

なお、遺跡の大部分は水田であり、一部畑地となっている。冬期には麦が蒔かれている水田が多い。

徳倉城址関連遺跡は大字河内字小遠藤に所在する。三谷川の上流部に位置し、連郭式山城の徳倉城（県指定史跡）の東山麓にある。地籍図では「ウラ門下」一帯に相当する地区である。この「小遠藤」一帯は立派な割石で石垣を構築した水田がほとんどで、一見すると屋敷跡が水田に再利用された様相を呈しているため、この付近一帯に根小屋が存在した可能性がある。現状は水田及び畑地である。

第２節　調査に至る経過

原遺跡は縄文時代晩期、弥生時代中期、後期の複合遺跡で、昭和33年に鎌木義昌、江坂進の両氏によって始めて紹介された遺跡である。（註３）特に遺跡の下層から出土した縄文時代晩期の土器は「原下層式」と呼ばれ、瀬戸内地方の晩期中葉の標式土器として著名である。

遺跡発見の端緒は前節に述べた如く、瓦粘土を採掘中に遺物が多量に出土したためであるが、遺跡範囲はこうした古くからの瓦粘土採掘地を中心にしておもに国鉄津山線より東側部分を原遺跡として考えていたのである。

一方、河内地区の遠藤山山頂に総延長400ｍにわたって城郭施設を構築していた徳倉城の根小屋と推定される地区が「小遠藤」である。この宇垣地区一帯を４ブロックに分けて、昭和57年度から通年施行の県営圃場整備（83.6ha）が実施されることになったため、御津町教育委員会から徳倉城址関連遺跡と原遺跡の保存問題についての協議があった。このため、昭和56年11月に県文化課、御津町教委、同町農村整備課が現地踏査した。踏査及び工事計画からみて、早急にこれら二地区の遺跡の種類、規模等を確認し、遺跡の保護、保存の対策を講ずるための基礎資料を得る必要があるため、県教育委員会は昭和57年度国庫補助を受けて発掘調査を実施することになった。

発掘調査は専門委員の指導、助言を得て、昭和57年11月４日から昭和58年２月28日まで実施した。調査にあたっては御津町役場、同町教育委員会、同町文化財保護委員をはじめ地権者等関係各位には多大の御協力を得た。また発掘作業に従事していただいた地元有志の方々に協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。

調査体制

専門委員

鎌木義昌　岡山理科大学教授

近藤義郎　岡山大学教授

水内昌康　岡山女子看護専門学校教頭

岡山県教育庁文化課

早田憲治　課長

橋本泰夫　課長代理

河本　清　埋蔵文化財係長

田中建治　主任

遠藤勇次　主任

松本和男　文化財保護主査（調査担当）

岡田　博　文化財保護主査

江見正己　文化財保護主事

中野雅美　文化財保護主事

第３節　調査の方法と経過

発掘調査は圃場整備が計画されている範囲内を中心にトレンチを設定したが、対象外の地区にも３ヶ所（Ｔ－７、17、29）設定している。原遺跡は調査前の踏査で微高地及び旧河道等を

あらかじめ想定することができたため、微高地の縁辺部を中心にトレンチを設定した。一方、徳倉城址関連遺跡は石垣構築が見事な水田を中心にトレンチを設定している。発掘調査は2ｍ×5ｍのトレンチを基本とするが、一部で2ｍ×10ｍを採用している。

調査は昭和57年11月8日から徳倉城址関連遺跡から開始した。遺跡は東面する緩斜面に形成された水田に予想されたため、水田平坦面にＴ－１～４を設定した。その結果、現水田の造成土層を確認したが、遺構、遺物は全く存在しないことが判明した。原遺跡は微高地全面に広がる遺跡であるため、遺跡端部を重点的に確認して、この地域一帯の微地形を復原することを目的とした。　そのため、Ｔ－１～５では第２微高地の後背湿地を、Ｔ－12、21、22では南西端部を、Ｔ－13、14、16、20では第３微高地端部を、Ｔ－18では第４微高地中心部を確認したのである。そして、縄文時代晩期の土器、遺構がどの地点及び層位で発見されるか注目したが、トレンチ調査の限界もしくは調査地点の設定場所が適切でなかったためか、大きな成果を得ることができなかったのである。

今回の調査では、縄文時代晩期の遺物をＴ－12、27、29で、弥生時代前期の遺物をＴ－６、13、14、27、28において出土したが、弥生時代中期～室町時代の遺物はほぼ全域でみられた。遺構は旧河道や後背湿地以外でほとんど検出することができたが、主要なものとしてＴ－14、18、29の住居址（弥生時代後期）がある。

このように、29ヶ所にトレンチを設定して縄文時代晩期～室町時代の遺物が出土したが、この宇垣地区に４つの微高地を想定することができたのは大きな成果であった。

日誌抄

昭和57年

11月４日(木)　発掘器材の運搬作業。

８日(月)　徳倉城址関連遺跡へのトレンチ設定（Ｔ－１～４）及び調査の開始及び写真撮影。

９日(火)～13日(土)　原遺跡の発掘調査開始。Ｔ－１～５、10～19の発掘作業。

15日(月)～17日(木)　Ｔ－２～６、13の発掘作業。海抜高の移動作業。Ｔ－１～５の位置図作成。

18日(木)　Ｔ－２、３の発掘作業、徳倉城址関連遺跡トレンチ（Ｔ－１～４）の位置図及び断面図の作成作業。

19日(金)　Ｔ－１～４の発掘及びトレンチ位置図の作成。Ｔ－２、３の断面・平面プランの実測及び写真撮影作業。

20日(土)　Ｔ－１の遺構検出及び発掘。断面実測及び写真撮影。Ｔ－４の遺構検出及び発掘作業。

22日(月)　遺物、図面整理。

24日(水)　Ｔ－８、10の発掘。Ｔ－４～６の遺構検出、平・断面図の作成及び写真撮影。

25日(木)　Ｔ－13、20の遺構検出及び発掘作業。Ｔ－10、11の断面実測及び写真撮影。

26日(金)　Ｔ－13の遺構発掘、平・断面の実測及び全景、断面の写真撮影。

27日(土)　Ｔ－14、17の遺構検出及び発掘作業。

29日(月)　Ｔ－14の遺構発掘、写真撮影及び平・断面の実測。

30日(火)　Ｔ－12、21、22の発掘作業。御津町教育委員会、同町文化財専門委員一行の見学。

12月１日(水)　Ｔ－８、12、22の遺構発掘、写真

撮影及び平面プランの実測作業。
2日(木)　T－7の発掘。T－8の発掘、断面の実測及び写真撮影。
3日(金)　T－17の住居址発掘。
4日(土)　T－22の遺構検出及び掘り下げ。写真撮影、平面プランの実測。
6日(月)　T－12の発掘。調査トレンチの排水作業。文化庁調査官浪貝氏の来跡。御津町長、助役、教育長、次長の来跡。
7日(火)　T－7、12の発掘。トレンチ位置図の作成。
8日(水)　T－7の発掘、T－21、22の発掘、断面写真撮影及び実測。
9日(木)　T－7、9の発掘。T－22の断面写真撮影及び実測。
10日(金)　T－7の遺構発掘、断面写真撮影及び実測。
11日(土)　遺物整理。
13日(月)　T－6、9の断面写真撮影。T－18の遺構検出及び発掘。T－23の発掘。
14日(火)　T－23～25の発掘。
15日(水)　T－18を拡張、遺構検出及び発掘。T－23、24の断面写真撮影。
16日(木)　T－18の発掘、平面プラン実測。T－23、24の断面実測。T－25の発掘。
17日(金)　T－18の住居址、T－25、26の発掘。
18日(土)　T－26の発掘。
20日(月)　T－25、26の断面実測及び写真撮影。T－27の発掘。
21日(火)　T－18の住居址写真撮影、平面・断面プランの実測。T－27の遺構検出及び発掘、写真撮影。T－28の発掘。
22日(水)　T－28、29の発掘。
23日(木)　T－6の遺物とり上げ。T－17の発掘。T－27～29の発掘、平・断面の実測及び写真撮影。
24日(金)　T－7拡張区の発掘。T－17の遺構発掘。平・断面の実測及び写真撮影。
25日(土)～27日(月)　T－7拡張区の遺構発掘、平・断面の実測及び写真撮影。ドノウづくり。

昭和58年
1月5日(水)～8日(土)　T－6、9の平・断面実測、T－12の埋めもどし。遺物、図面の整理。
10日(月)～14日(金)　T－3～6、8、9、21、22の埋めもどし作業。
17日(月)～23日(日)　T－1、2、13、14、25、27の埋めもどし作業。遺物整理。
24日(月)～29日(土)　T－10、11、16、17、19、20の埋めもどし作業。
1月31日(月)～2月5日(土)　T－7、18、23、24の埋めもどし作業。発掘器材を徳倉城址へ運搬。
7日(月)～8日(火)　徳倉城関連遺跡のトレンチ（T－1～4）の埋めもどし。発掘器材を原遺跡へ運搬。
9日(水)～12日(土)　T－29の発掘。遺物整理。
14日(月)～19日(土)　T－29の発掘、1、2号住居址の検出、発掘及び写真撮影、平面プラン実測。
21日(月)～23日(水)　T－29の発掘、3、4号住居址の発掘、写真撮影、平面プラン実測、炭化材、遺物のとり上げ。
24日(木)　遺物整理。
25日(金)　T－29の断面写真撮影、実測作業。北西隅の土器溜のとり上げ。埋めもどし作業。
26日(土)～28日(月)　T－29の埋めもどし。発掘器材の撤収。

註

(1) 鎌木義昌、江坂　進『岡山縣御津町原遺跡―縄文晩期の土器を中心として』　瀬戸内考古学　第2号　瀬戸内考古学会　昭和33年
(2) 註1に同じ。
(3) 註1に同じ。
(4) 註1に同じ。

第3章　調査の概要

第1節　原遺跡

トレンチ調査の概要

原遺跡では29ヶ所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。（第3図）そのうち、遺構が検出されなかったトレンチはT－1、3、9～11、15、16、19～21、23、24～27であったが、遺物は出土している。ここでは、遺跡の範囲を想定するため、T－2、4～8、10、12～14、16～18、20、22、26について順不同にその概要を記す。

T－2、4、5（第4図）

調査区の北東部に位置する。遺構はT－2では第7層、T－4では第4層、T－5では第4層において柱穴ないし土壙が検出されている。断面観察では各土層はほぼ水平堆積しているが、T－2、5はT－4に比べて基盤層が少しずつ傾斜しており、微高地の端部に近いものと思われる。遺物は基盤層の上層において、弥生時代後期の土器、青磁が出土している。

T－6（第5図）

T－5の南に位置する。土層は6層に区分されるが、ほぼ水平に堆積している。遺構は6層で検出されている。遺物は4層において完形に復原できる弥生時代後期後半の壺が、5層においては弥生時代前期の土器、古墳時代後期の須恵器を包含する土層である。

T－7（第5図）

調査区の東端に位置し、圃場整備計画範囲から除外されている地点であるが、瓦粘土を採土していたためか、断面に遺物が多く認められたためトレンチを設定した。遺構面は5層で認められ、弥生時代後期の柱穴が検出された。遺物は3層において弥生時代後期の土器が出土している。

T－8（第6図）

T－7の南西に位置するが、基盤層のレベルはほぼ同一である。遺構は5層を切り込む柱穴や土壙が検出されたが、基盤層である10層においても柱穴が検出されたことから、このトレンチ周辺では遺構面が二層あることが判明した。時期は遺構内に遺物が無いため不明である。遺物は5層で弥生時代後期の土器、古墳時代後期、奈良時代の須恵器、鉄滓、炉壁片が出土した。

T－12（第6図）

玉松園の東に旧河道が存在するが、この旧河道の対岸に設定したトレンチである。基盤層は耕作土直下に表われた。遺構は柱穴が検出されたのみである。時期は弥生時代後期後半のもの

と平安～鎌倉時代（C－1）のものがある。遺物は2層上面で縄文時代晩期の土器、弥生時代後期の土器、石鏃、サヌカイトチップ（総重量52.6g）が、3層において打製のスクレーパー状石器が出土した。

なお、3層で縄文時代の石器が出土したため、遺構の検出を試みたが、確認出来なかった。4層以下は無遺物層である。

T－22（第7図）

T－12の東に位置する。遺構は7、8、10層で整地面をつくった造成土と11層において柱穴が検出されたことから、ここにおいても遺構面が二層あることが判明した。遺構の時期は不明である。遺物は1層で古墳時代後期～奈良時代の須恵器、土師器が、3層で鉄滓、6層で弥生時代後期の土器、土師器が出土している。

T－10、26（第7図）

天神、鳴の両部落沿いの後背湿地部分に入れたトレンチである。いずれのトレンチもほぼ水平堆積を呈しているが、T－10では現地表からマイナス1mの6層で黄褐色の地山土に達し、極めて浅い湿地帯であった。T－26では4層で後背湿地の状況を呈する粘土層を、5層で青白色砂層を確認している。出土遺物はない。

T－13（第8図）

鳴部落の微高地では最も北に位置するトレンチである。遺構は調査区のほぼ中央と北東端部において検出された。溝状遺構と思われる北東端部の遺構は7層から切り込んでいる。この遺構の上層（5層）には弥生時代後期の土器、下層（6層）には炭が検出されている。注目すべきこととして弥生時代前期の包含層（8層）を確認できたことである。

T－14（第8図）

T－13の南東部に位置し、この微高地の東側端部付近と考えられる地点である。遺構は基盤層である3層において検出された。遺構は竪穴住居址のコーナー部分のみで規模は不明であるが、周溝、床面も良好に保存されていた。弥生時代後期の住居址と考えられる。遺物としては弥生時代前期、後期の土器がある。

T－17（第9図）

玉松園の西に設定したトレンチである。この微高地の中央からやや南に下がった地点に位置する。遺構は4層において検出されている。広範囲に検出すれば掘立柱建物としてまとまる可能性がある地区である。遺物は2、3層で縄文時代晩期の土器、土師器、備前焼、サヌカイトチップ、鉄滓が出土している。

T－16、20（第9図）

微高地の西および南側端部と思われる位置に設定したトレンチである。T－16、20では遺構

を検出することが出来なかったが、T－16では11層が、T－20では8層が基盤層と考えることができる。T－16、20は他のトレンチの基盤層とレベルでも極端に低いことからみて、微高地端部近くの様相を呈しているといえよう。

T－18（第10図）

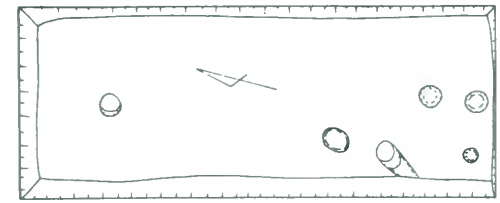
宇垣幼稚園の東に位置する。このトレンチ調査によって原遺跡の最西端の微高地を確認することができた。遺構は3層と基盤層である16層を切り込んだ遺構面が二層あることが判明した。特に調査区の東側で検出された竪穴の円形住居址は保存状態が良好であった。時期は床面出土の壺、周溝内の高杯などからみて、弥生時代後期後半の住居址と考えられる。遺物は1～3層において、弥生時代中期中葉、後期の土器、土師器が出土している。

T－29（第11、12図）

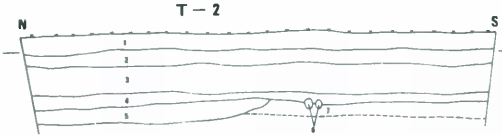
T－22の南に位置し、圃場整備範囲外の地点である。そして昭和33年に鎌木、江坂両氏によって発表された地点に最も距離的にも近い地点であるため、縄文時代晩期の遺物が層位的に検出される可能性をもつトレンチであった。調査の結果、基盤層である7層を掘り込んだ弥生時代後期の円形の竪穴住居址と古墳時代前期の住居址が検出されたが、ここでも縄文時代の遺構、包含層等を確認することができなかった。

弥生時代の住居址は4軒が切り合って検出された。いずれも規模等については範囲が狭いため不明な点が多いが、保存状態は良好であった。特に火災のため焼失した4号住居址床面から銅鏃が出土し注目された。遺物としては耕作土～基盤層直上で縄文時代晩期の土器1片、弥生時代後期後半～鎌倉時代に至る土器が出土した。

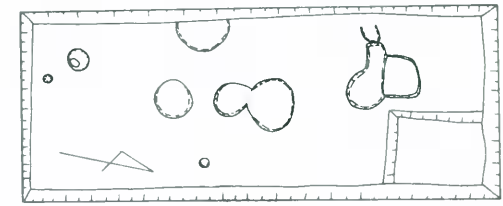
第3図　原遺跡トレンチ設定図（S＝$\frac{1}{7500}$）



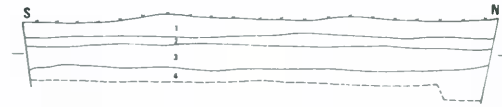
T－2



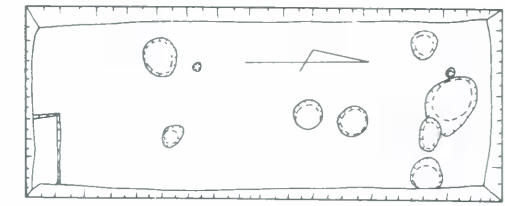
1．耕作土層
2．灰色粘土層
3．灰黄色粘土層
4．黄褐色粘土層
5．茶褐色粘質土層
6．黄茶褐色ブロック土
7．黄色粘質土層



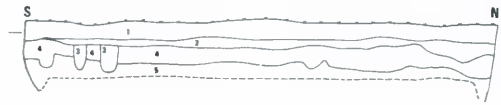
T－4



1．耕作土層
2．黄茶褐色土層
3．茶褐色土層
4．黄褐色土層

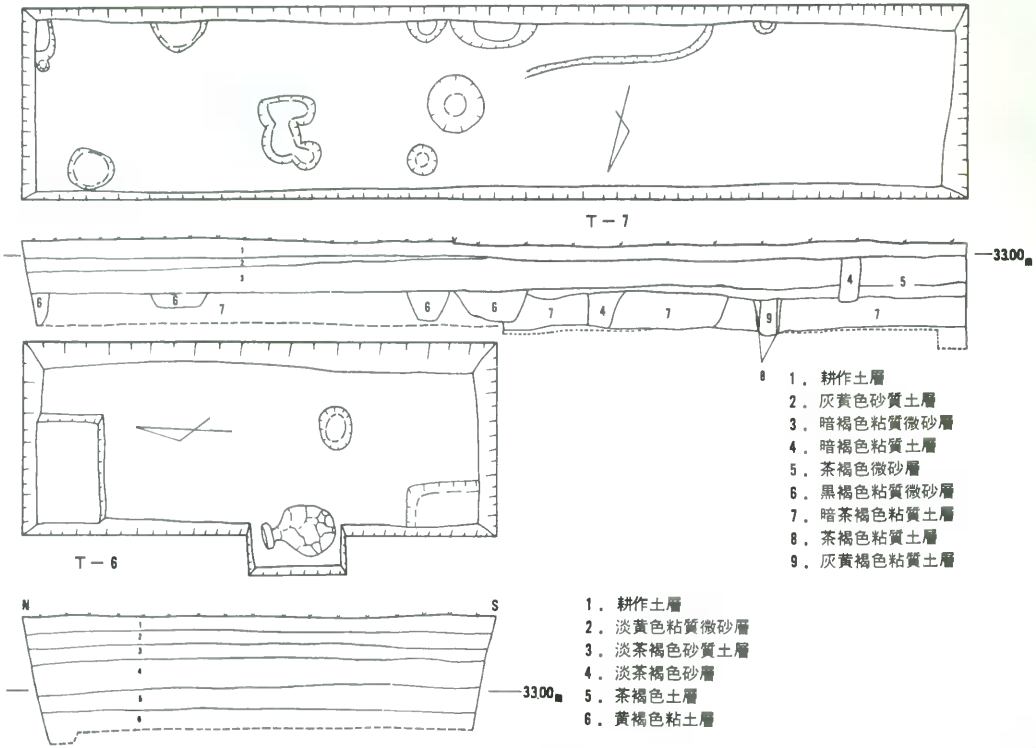


T－5

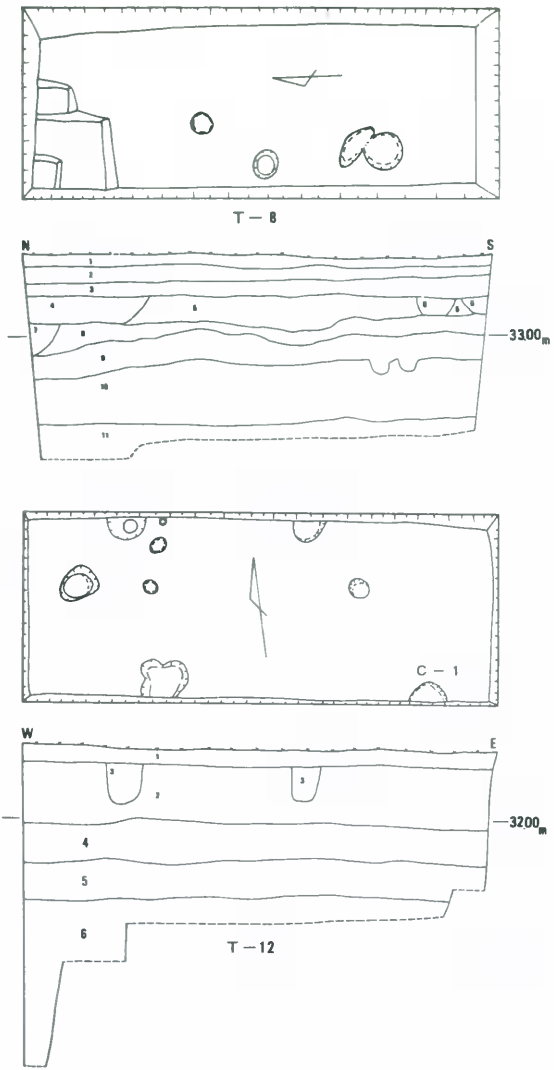


1．耕作土層
2．茶褐色微砂層
3．茶褐色粘質土層
4．暗茶褐色粘質土層
5．黄褐色粘質土層

第4図　T－2、4、5平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$）。



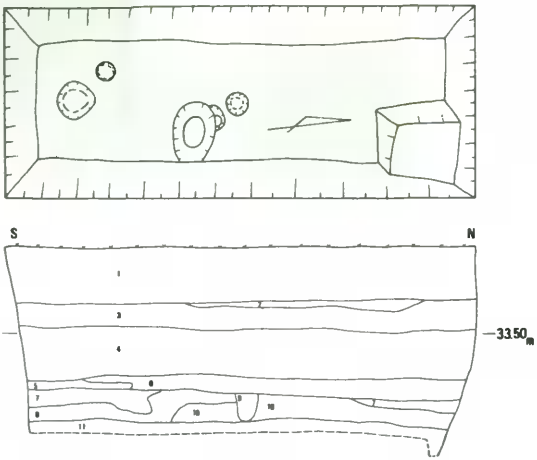
第5図　T－6、7平・断面図（S－$\frac{1}{60}$）



1．耕作土層
2．茶灰色粘質土層
3．茶褐色粘質土層
4．暗褐色粘質土層
5．暗茶褐色粘質土層
6．暗褐色粘質土層
7．暗茶褐色粘質土層
8．茶褐色微砂層
9．暗褐色粘質土層
10．茶褐色粘質土層
11．黄茶褐色粘質土層

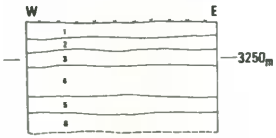
1．耕作土層
2．茶褐色粘質土層
3．暗茶褐色粘質土層
4．茶褐色粘土層
5．褐色粘土層
6．茶褐色粘土層

第6図　T－8、12平・断面図（S－$\frac{1}{60}$）



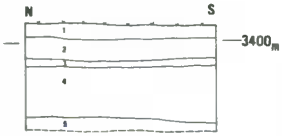
T－22

1．耕作土層
2．灰黄色細砂層
3．茶褐色粘質微砂層
4．黒色粘質土層
5．茶褐色粘質土層
6．暗茶褐色微砂層
7．暗褐色粘質土層
8．暗茶褐色粘質土層
9．暗灰褐色粘質微砂層
10．茶褐色粘質微砂まじり層
11．茶褐色粘土層



T－10

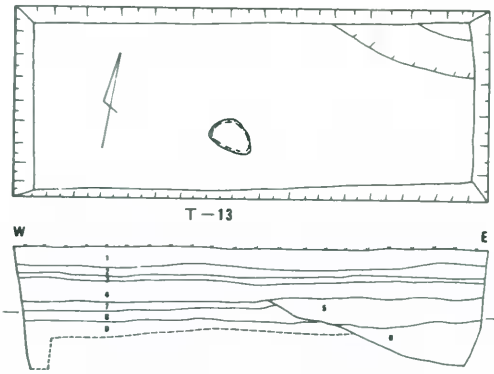
1．耕作土層
2．灰色粘質微砂まじり土層
3．灰褐色粘質微砂まじり土層
4．灰褐色粘質土層
5．灰色粘質土層
6．黄褐色粘質土層



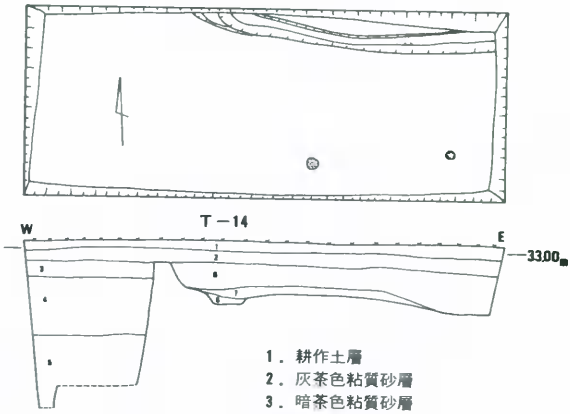
T－26

1．耕作土層
2．暗灰黒色粘質土層
3．灰白色粘質土層
4．灰黒色粘質土層
5．青白色砂層

第7図　T－22、10、26平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$）

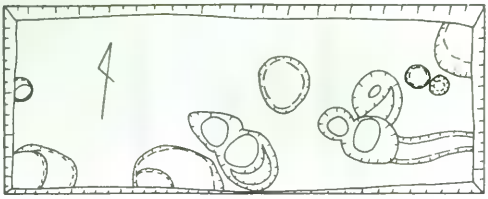


1．耕作土層
2．灰色粘質土層
3．黄褐色粘質土層
4．茶褐色粘質土層
5．茶褐色粘質土層
6．茶褐色粘質土層
7．黄茶褐色粘質土層
8．淡茶褐色粘質土層
9．黄茶褐色粘質土層

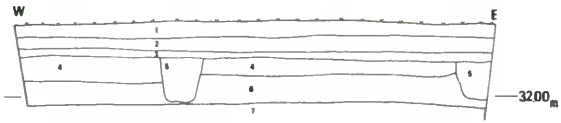


1．耕作土層
2．灰茶色粘質砂層
3．暗茶色粘質砂層
4．黄茶色粘質土層
5．茶色粘質土層
6．黒茶色粘質土層
7．黄灰色粘質土層

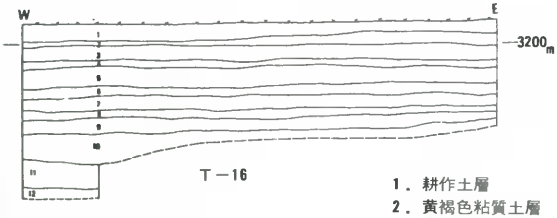
第8図　T－13、14平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$）



T－17

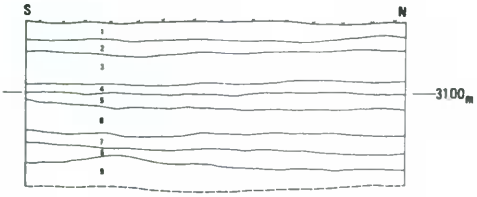


1．耕作土層
2．淡灰褐色粘質砂層
3．茶褐色粘質土層
4．暗茶褐色粘質土層
5．暗褐色粘質土層
6．暗茶褐色粘質土層
7．黄褐色粘質土層



T－16

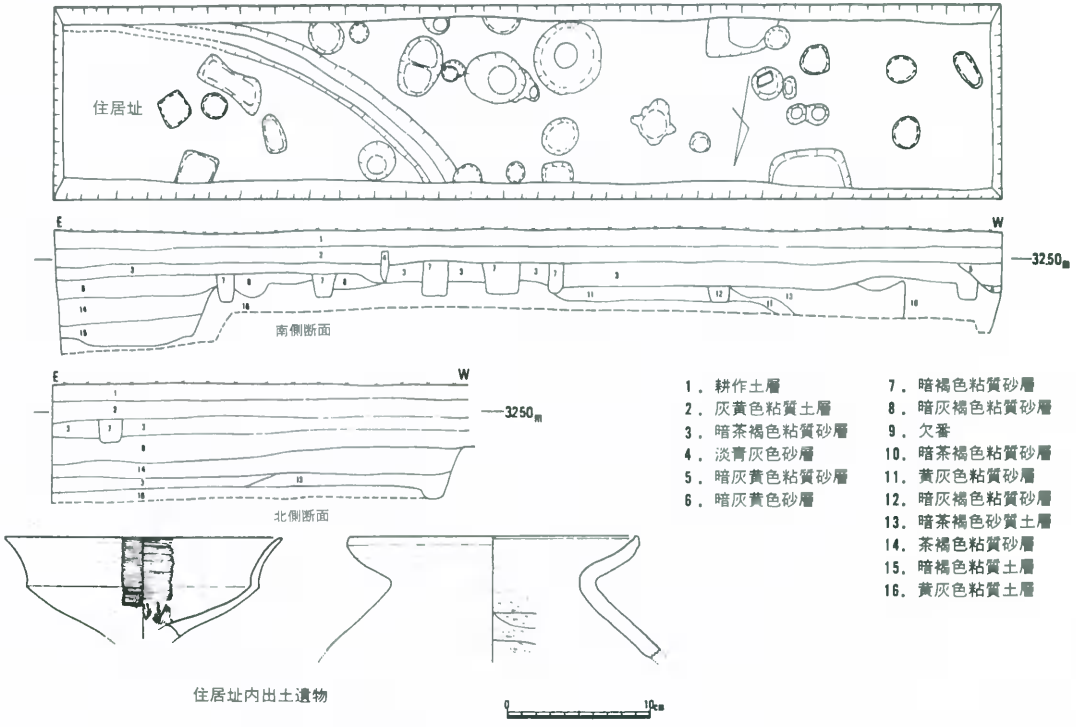
1．耕作土層
2．黄褐色粘質土層
3．茶褐色粘質土層
4．灰色粘質土層
5．黄灰褐色粘質土層
6．灰黄褐色粘質土層
7．灰褐色粘質土層
8．黄茶褐色粘質土層
9．茶灰褐色粘質土層
10．暗褐色粘質土層
11．黄茶色粘質土層
12．灰黄色砂層



T－20

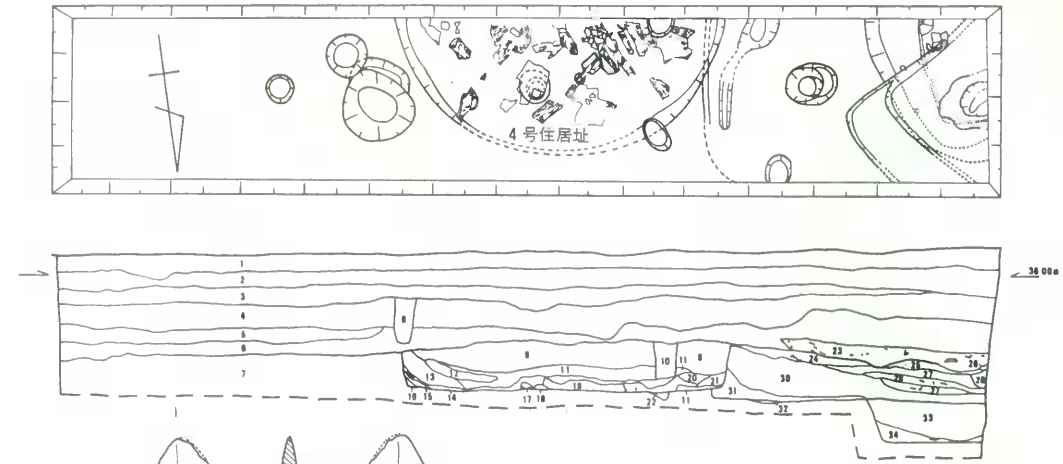
1．耕作土層
2．茶褐色粘質微砂層
3．灰茶褐色粘質土層
4．黄灰褐色粘質土層
5．暗灰色粘質土層
6．黄褐色粘質土層
7．茶褐色粘質土層（微砂まじり）
8．茶褐色粘質土層
9．灰黄色微砂層

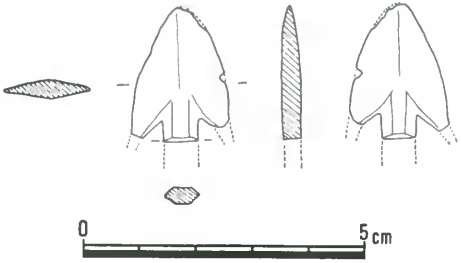
第9図　T－17、16、20平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$）



1．耕作土層
2．灰黄色粘質土層
3．暗茶褐色粘質砂層
4．淡青灰色砂層
5．暗灰黄色粘質砂層
6．暗灰黄色砂層
7．暗褐色粘質砂層
8．暗灰褐色粘質砂層
9．欠番
10．暗茶褐色粘質砂層
11．黄灰色粘質砂層
12．暗灰褐色粘質砂層
13．暗茶褐色砂質土層
14．茶褐色粘質砂層
15．暗褐色粘質土層
16．黄灰色粘質土層

第10図　T－18平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$）、住居址内出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

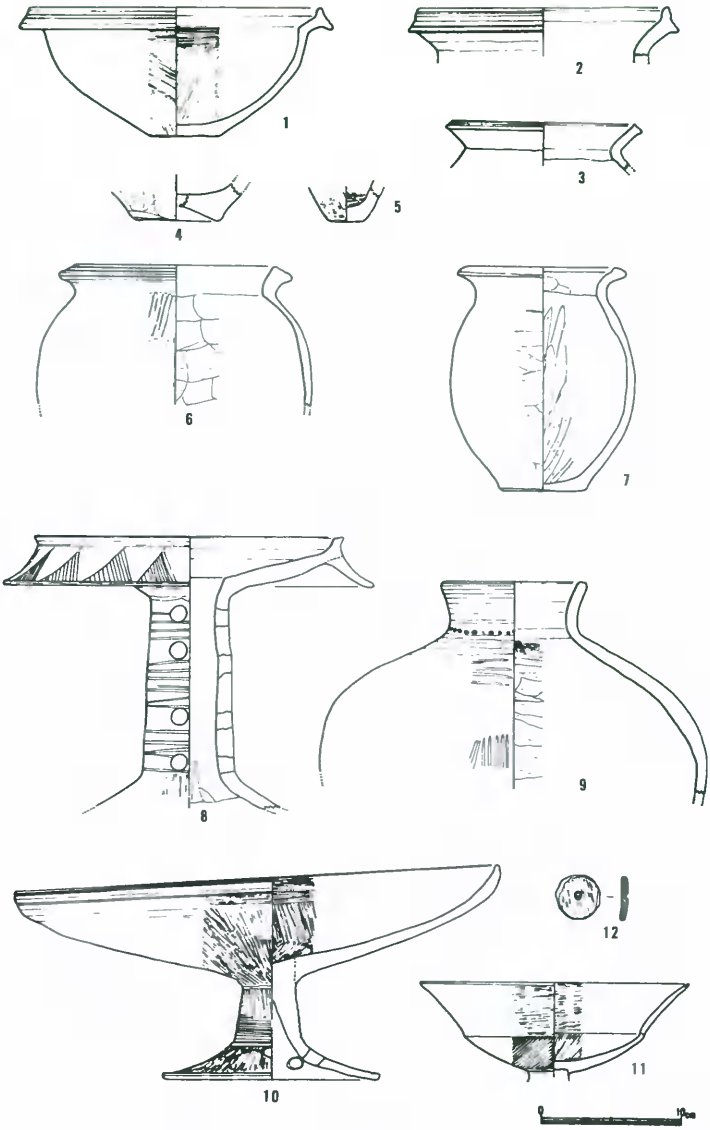




4号住居址内出土鋼鏃（S＝$\frac{1}{1}$）

1．耕作土層
2．黄淡茶色土層
3．黒茶褐色土層
4．黒灰茶褐色土層
5．暗灰茶色土層
6．淡茶褐色土層
7．暗黄茶色粘質土層
8．暗灰茶褐色土層
9．黒茶褐色土層
10．暗赤褐色土層
11．黒茶褐色土層
12．暗灰茶色土層
13．暗黄茶色粘質土層
14．黒茶褐色土層
15．暗茶褐色土層
16．暗黄茶褐色土層
17．淡赤褐色（焼土）土層
18．暗赤褐色土層
19．暗赤褐色土層
20．暗茶褐色（粘質）土層
21．暗茶褐色（粘質）土層
22．黄白色粘土層
23．黒茶褐色土層
24．暗灰茶色土層
25．黒茶褐色土層
26．淡茶黄白色土層
27．暗灰茶色土層
28．淡茶色粘質土層
29．暗茶褐色土層
30．茶褐色土層
31．暗茶褐色粘質土層
32．31に若干の灰白色土を含む層
33．淡茶色土層
34．黒灰色粘質土層

第11図　T－29平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$）及び4号住居址内出土遺物（S＝$\frac{1}{1}$）



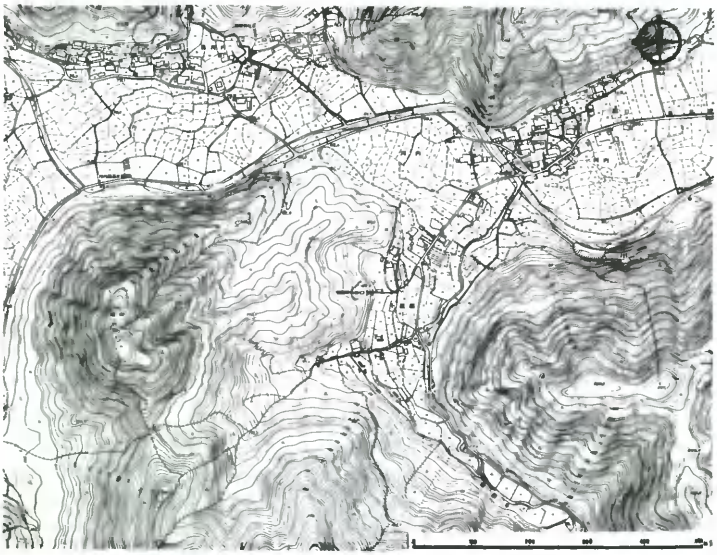
第12図　T－29内出土遺物（1～5…2号住居址，6，7…4号住居址，8～12…土器溜）

第２節　徳倉城址関連遺跡

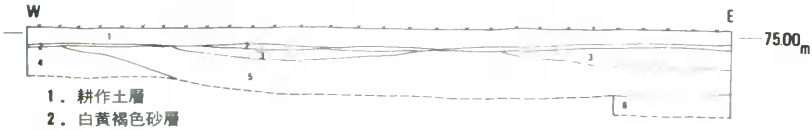
この調査地区ではトレンチを４本設定して発掘調査を実施した。（第13図）調査の結果、遺構および遺物を全く確認することが出来なかった。ここでは、Ｔ－１の土層断面によって、その概要を記してみたい。

Ｔ－１（第14図）

Ｔ－２と基本的には同じ堆積を示すトレンチである。すなわち、トレンチの東側半分は人頭大の円礫を含む砂礫層が東に厚く堆積する土層であるが、この造成が中世のものか近世のものかは現在のところ不明である。出土遺物は無い。



第13図　徳倉城址関連遺跡トレンチ設定図



1．耕作土層
2．白黄褐色砂層
3．茶褐色砂層
4．灰黄色砂礫層
5．暗灰黄色砂礫層（人頭大の円礫あり）
6．灰黄色砂礫層

第14図　Ｔ－１土層断面図（Ｓ＝$\frac{1}{60}$）

第３節　遺物（第15～18図）

今回の調査は原遺跡の範囲確認が主目的であったため、調査面積および遺構の掘り下げが極めて限定されていたのである。にもかかわらず、耕作土、包含層、遺構検出面において縄文時代晩期から室町時代にまでいたる遺物が出土した。

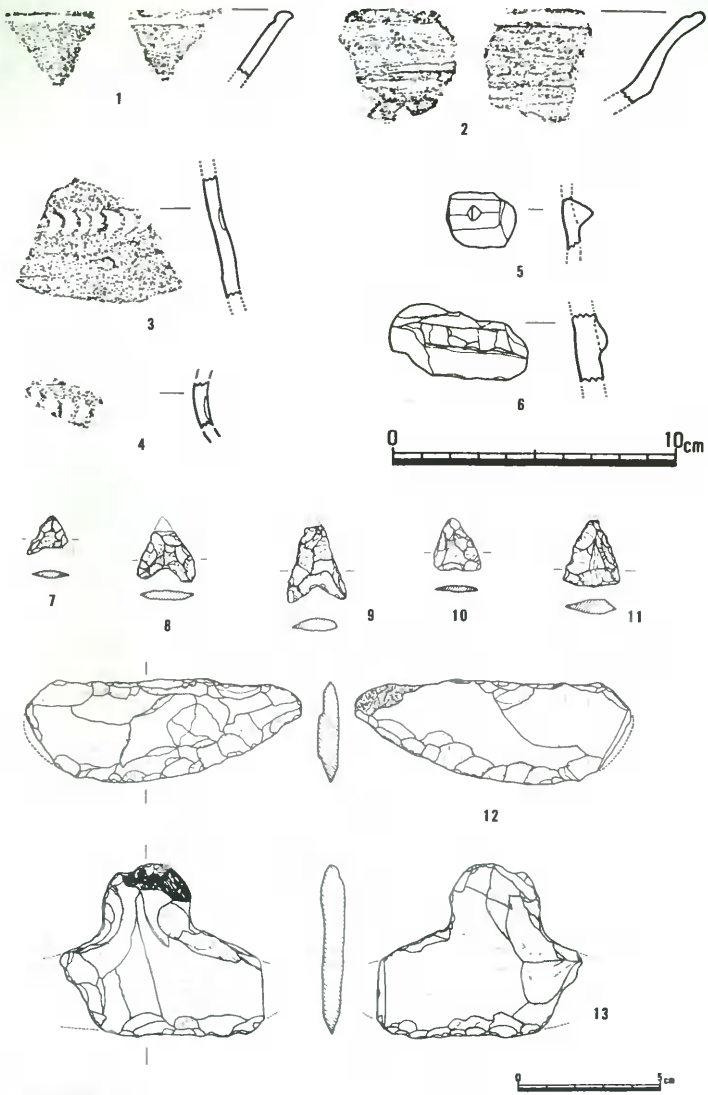
今回の調査で最も古い時期の遺物はやはり縄文時代晩期のものである。出土したトレンチはＴ－12、17、27、29であるが、遺物の出土量が少ないため、分類は困難であるが、次のような分類が可能であった。第１類は精製研磨された浅鉢形土器(1)、第２類は二枚貝による条痕がある浅鉢形土器(2)、第３類は凸帯文および瓜形文をもつ甕形土器(3)～(6)である。小破片が６点しか出土していないため問題は残る。特に(6)は胎土が弥生時代前期のものに酷似しているが、縄文時代晩期後葉の突帯文土器（黒土ＢⅡ式）と考えられる。

これら、縄文時代晩期の土器（１～４）は従来から「原下層式」と呼ばれて分類されているものばかりであった。

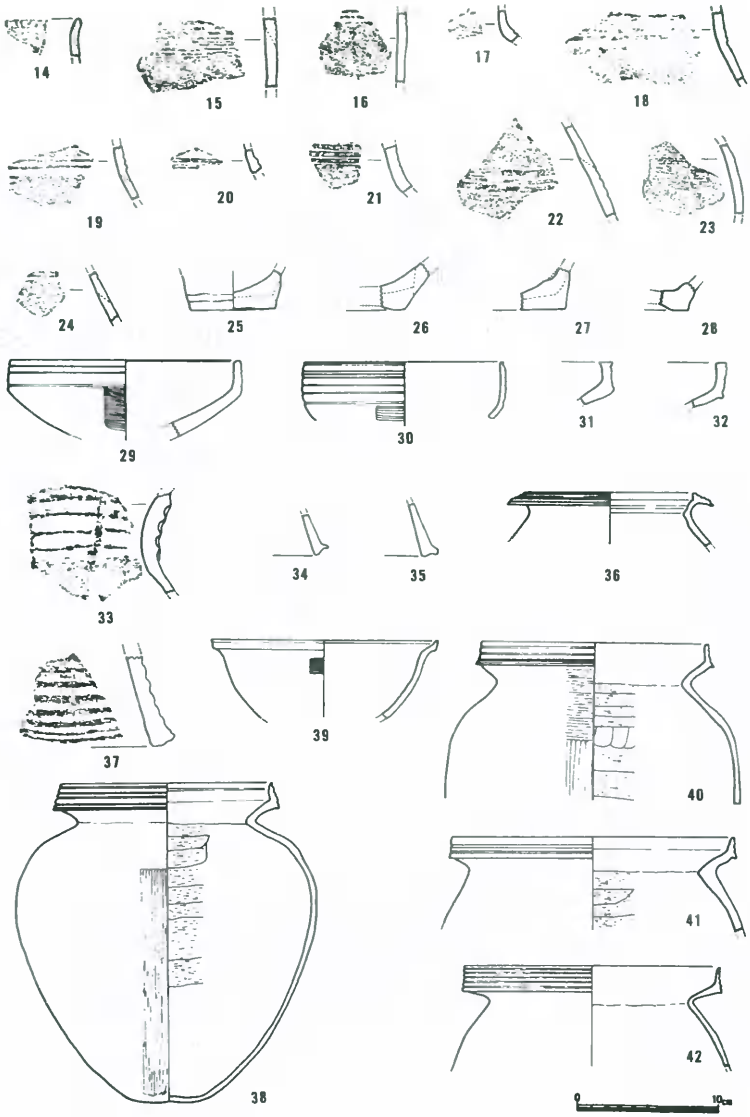
剥片石器は今回も出土しており、この時期の剥片石器が資料的に増加したといえよう。(12)は薄い横長剥片の両側辺に丁寧な調整痕を施した石器である。上部縁辺が刃潰しとなり、下部が刃部となるものである。石材はサヌカイト、重量は26.7ｇである。(13)は大形の石匙である。(12)と同じく、薄い横長剥片を利用してつくった石器である。両端部が欠損しているが、復元するとかなり大形の石器となる。石材はサヌカイト、現重量は35.4ｇである。

弥生時代になるとほぼ全域で遺物の出土がみられるものの、前期についてはＴ－６、13、14、27、28とまだ出土地点が限定されている。そして、遺物の出土量も少ないのである。前期前半の土器として甕、壺（14）～（28）がある。中期中葉～後半のものとして（29）～（37）が、後期後半の土器として（39）～（44）がある。特に（43）には口縁部全体にヘラ描きによる細い特異な沈線文様帯が描かれている。

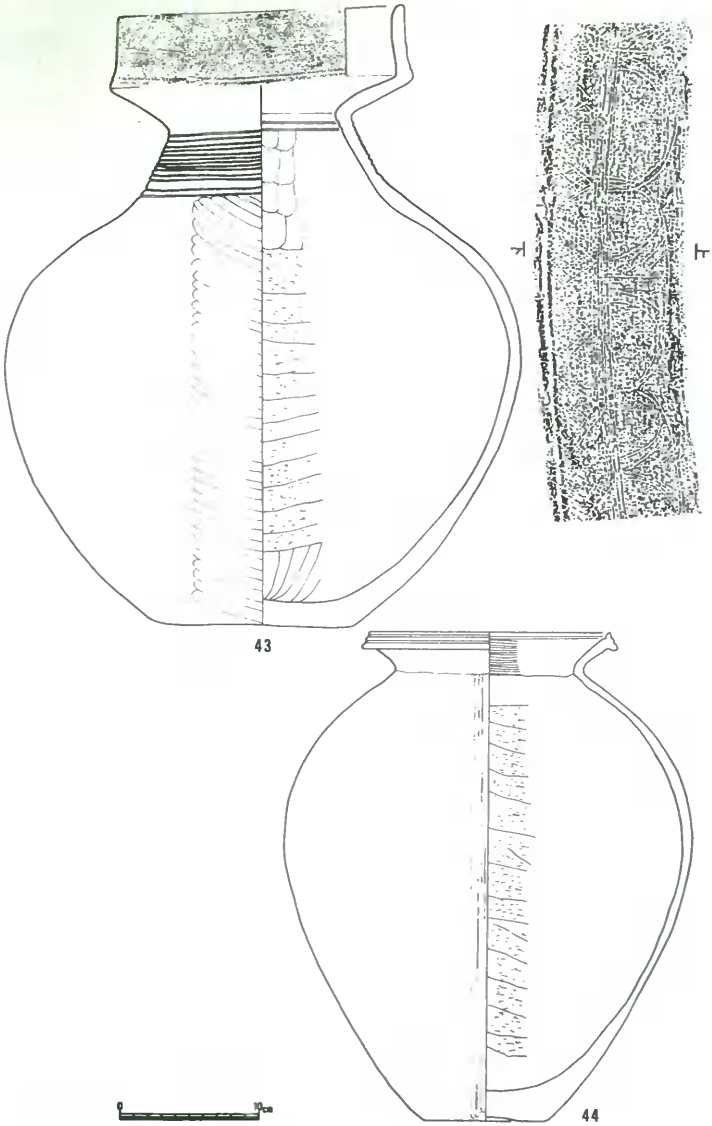
古墳時代のものとしては須恵器（45）～（50）、製塩土器（60～62）がある。奈良時代のものとして（51）～（59）、平安時代から鎌倉時代のものとして（63）～（76）がある。（69、72～76）は白黄色を呈するいわゆる「早島式土器」と呼ばれるものである。室町時代のものとしては備前焼のスリバチ（77）がある。（78）はＴ－６において出土した平瓦である。１点のみであるため問題は残るが、恐らく白鳳時代のものと考えられる。



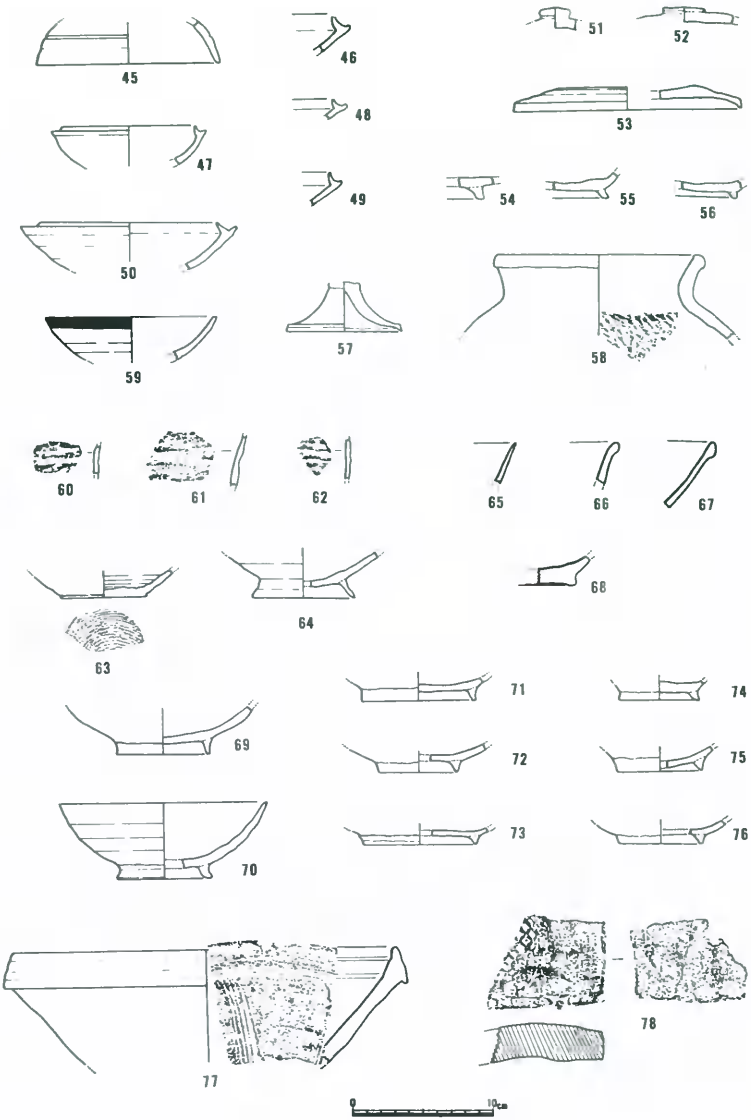
第15図 原遺跡出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{2}$）



第16図　原遺跡出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{4}$）



第17図　原遺跡出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{4}$）



第18図　原遺跡出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{4}$）

第4章　まとめ

今回の原遺跡の調査は先学の研究成果を参考にしながら、遺跡の規模、性格を確認することを目的に実施した。特に縄文時代晩期の立地や遺物の問題については、今回の調査でかなり解決されるのではないかと思われたが、追加資料を得ることができなかったため問題点は依然として残ることになった。

しかし、今回の調査で遺跡全体の範囲が約354,000㎡におよぶ広大な遺跡であることが判明したことは大きな成果であった。ここでは、確認調査及び踏査結果をもとに判明した原遺跡の実体を記してまとめにかえたい。

当遺跡は旭川の右岸に形成された沖積平野に所在し、第1章で述べたように4つの大きな微高地を想定することができたため、現在の旭川に最も近い（東から）微高地を第1微高地とし、順次第4微高地まで名称をつけた。（第19図）（註1）

第1微高地は約104,000㎡ある。圃場整備の対象外となっているため、調査は実施できなかったが、微高地の西側を中心に遺物の散布がみられることから集落址が予想される微高地といえよう。第2微高地は約126,000㎡ある。原遺跡の中心であるが、瓦粘土採掘のため国鉄津山線より南側で大規模に破壊されている。本来は第1微高地と連続していた微高地であったが、かなり新しい時期に河道で分断されたものと思われる。トレンチ調査の結果、遺構としては弥生時代後期の住居址、柱穴などを検出しており、遺物では縄文時代晩期～中世に至る土器を出土している。第3微高地は約120,000㎡ある。玉松園や宇垣コミュニティセンターの南などで遺跡の一部が消滅しているが、トレンチ調査で弥生時代後期の住居址、柱穴等の遺構を検出した。遺物は第2微高地とほぼ同時期のものが出土している。第4微高地は約4,200㎡ある。三谷川の氾濫によって形成されたもので、この地域では最小の微高地であるが、トレンチ調査の結果、弥生時代中期中葉の柱穴、後期後半の住居址を検出した。遺物は弥生時代中期中葉～奈良時代のものがある。

このように、原遺跡は縄文時代晩期から中世までの長期間にわたる遺物を出土する大規模な複合集落址であることを明らかにすることができた

近年、当遺跡と同様に弥生時代前期の遺物と縄文時代晩期の土器が共伴して出土する事例がかなり確認されているため、当遺跡での在り方について若干記しておきたい

最も発達した沖積平野に形成された遺跡にもかかわらず、縄文時代晩期の遺物は第2微高地では南、南西部周辺に、第3微高地では中央部から北西端部とほぼ全域で出土している。一方、弥生時代前期の土器は第2微高地ではT－6のみであるが、第3微高地の北端部では縄文時代

晩期の土器や他の遺物と共伴して出土している。

このように、出土地点は微高地端部に認められるが、これは端部に堆積した可能性がある。やはり、当時の集落は微高地縁辺部に立地したのではなく、微高地中心部に小規模な集団が存存したと考えるのが妥当であろう。このことは、弥生時代前期前葉においても同様であったと推察される。

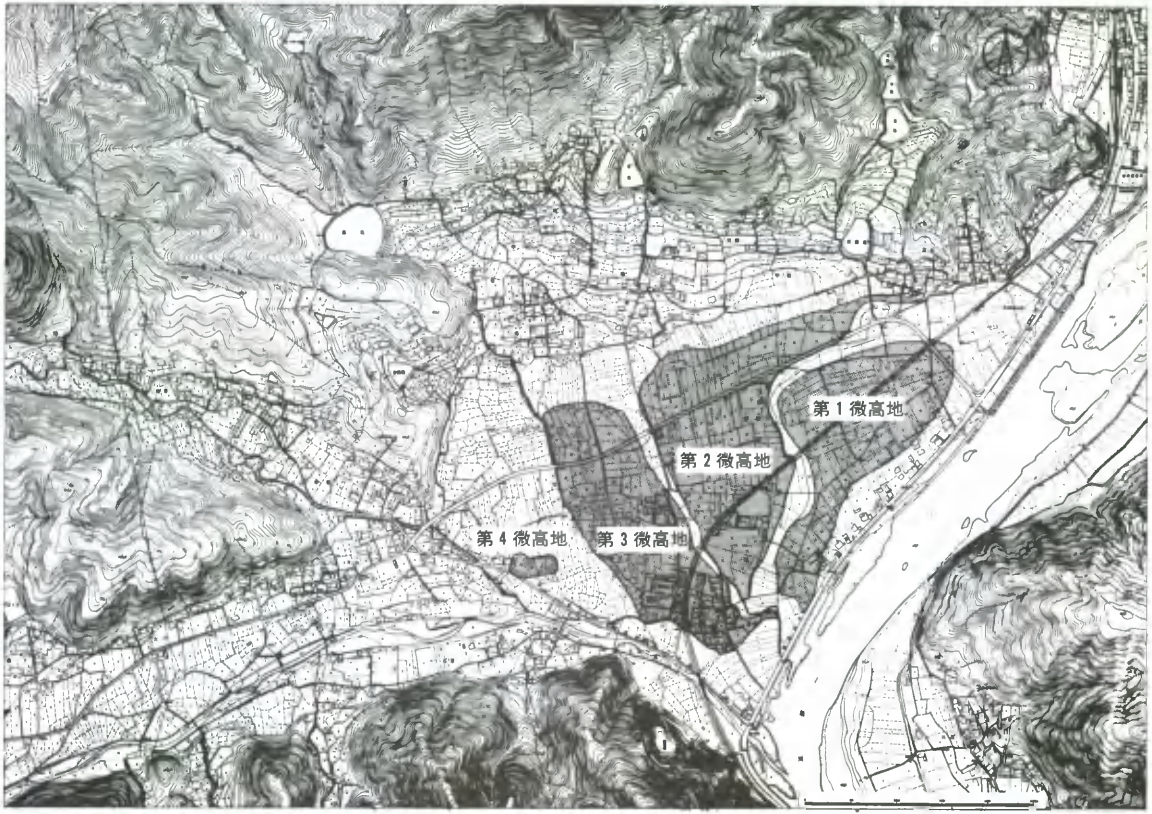
弥生時代後期になると遺構・遺物が数多く検出されていることからみても、この時期では御津町内においては最も大規模な集落に発展していたと考えられる。やはり当遺跡は御津町内における中心的な遺跡であり、また母体的な集団の遺跡であったことが遺物・遺構のうえからも想定できるのである。

一方、県指定の徳倉城は本丸、二の丸が石垣で構築される近世城郭の山城であるが、日常の生活根拠地である根小屋は山裾部に形成されていたと想定されるため、圃場整備計画地内において根小屋を推定できる「小遠藤」にトレンチ調査を実施したが、遺構を確認することができなかった。恐らく、現在の集落と重複して存在する可能性が強いと思われる。

今回の調査で遺跡の範囲をほぼ推定することができたため、この結果にもとづき圃場整備計画について再度協議しなければならないのであるが、今後の協議結果が注目される遺跡である。

註

(1)　微高地の範囲設定にあたっては、瓦粘土採掘のため既に微高地が消滅した地点もあるが、当時の地形を知るうえにおいて不可欠のものであるため、そのような地域も含めて範囲を設定している。



第19図　原地区における遺跡群（S＝$\frac{1}{12500}$）

図版 1

（1）　原遺跡遠景（北東から）

（2）原遺跡近景（北東から）

図版 2

（1）原遺跡近景（南から）

（2）原遺跡近景（南西から）

図版 3

（1）原遺跡近景（南西から）

（2）原遺跡瓦粘土採掘跡遠景（南西から）

（3）徳倉城址本丸石垣（東から）

図版 4

（1）徳倉城址関連遺跡遠景（北から）

（2）徳倉城址関連遺跡近景（北から）

図版 5

（1）原遺跡瓦粘土採掘跡近景（北東から）

（2）原遺跡発掘調査風景（東から）

図版 6

（1）T－4遺構全景（南から）

（2）T－5遺構全景（南から）

（3）T－6遺物出土状態（東から）

図版 7

(1) T—7遺構全景（東から）

(2) T—12遺構全景（東から）

(3) T—12土層断面（南東から）

図版 8

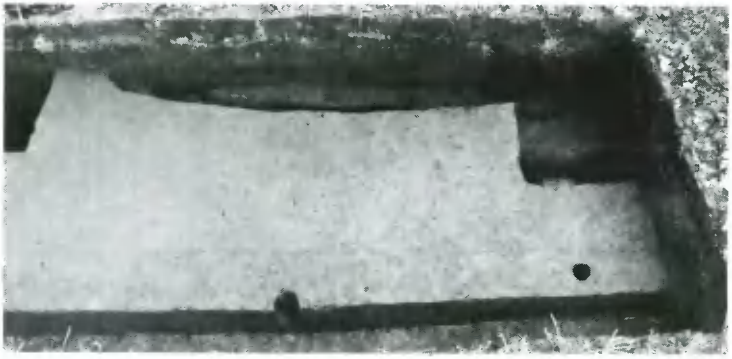
（1）Ｔ－８最下層遺構全景（北から）

（2）Ｔ－22最下層遺構全景（北から）

（3）Ｔ－26　全　　景（南西から）

図版 9

(1) T—13 遺構・土層断面（南から）



(2) T—14 住居址全景（南から）

(3) T—20 土層断面（南東から）

図版10

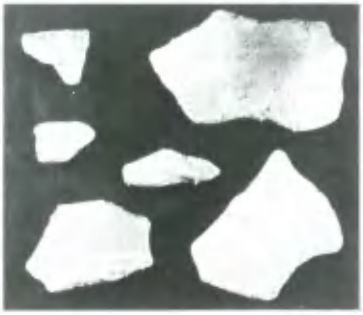
（1）Ｔ－16土層断面（東から）

（2）Ｔ－17遺構全景（東から）

（3）Ｔ－18遺構全景（東から）

（4）Ｔ－18住居址近景（東から）

図版11



出土遺物

図版12

1

2

3

4

5

6

7

1…2号住居址出土
2．3…4号住居址出土
4．5…T－29北西隅土器溜
6．7…T－6出土

出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 54

小阪部・永富遺跡
備中平遺跡
原遺跡

昭和58年3月15日印刷
昭和58年3月31日発行

編集・発行　岡山県教育委員会
印　　刷　岡山県出納局用度課